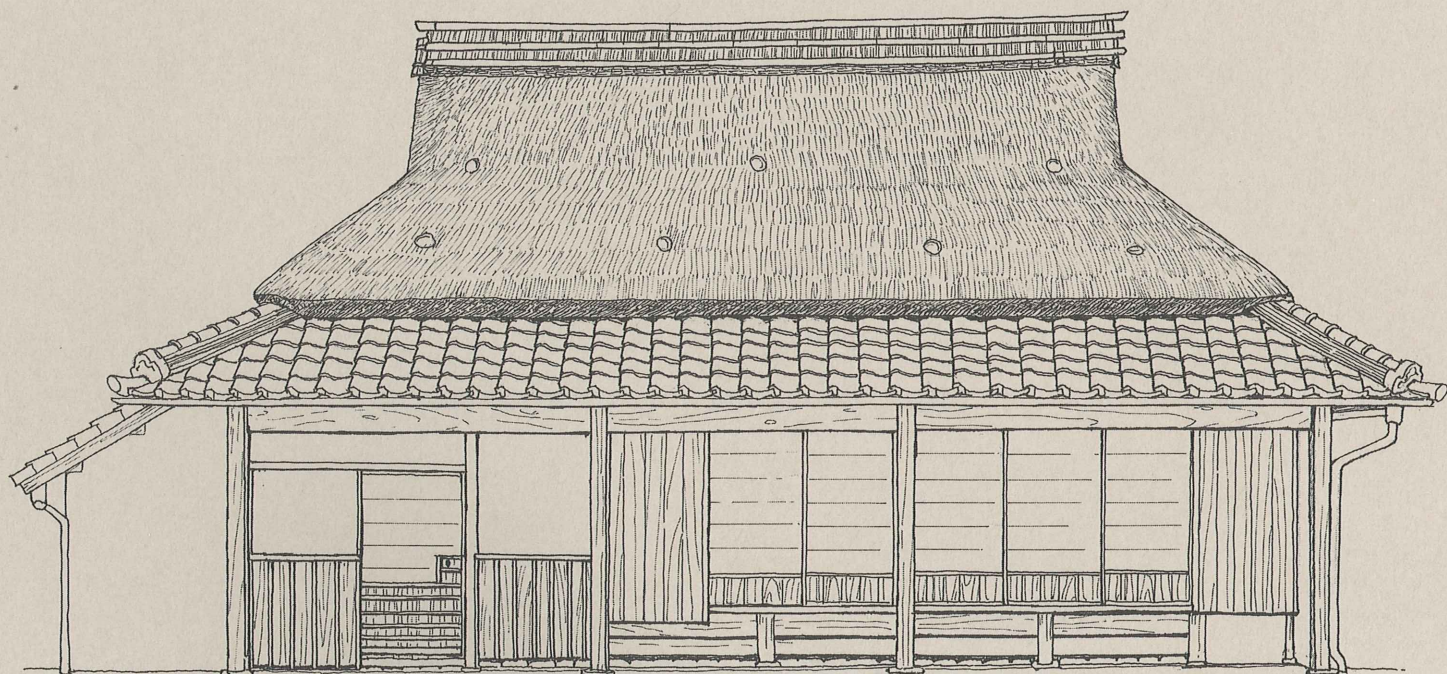


栗東歴史民俗博物館旧中島家住宅かまと再生事業報告書



イラスト：よろずでざいん（中川未子）

平成28年（2016）3月

市民とともに行う栗東歴史民俗博物館創造活動事業実行委員会

栗東歴史民俗博物館旧中島家住宅かまど再生事業報告書



イラスト：よろずでざいん（中川未子）

市民とともにを行う栗東歴史民俗博物館創造活動事業実行委員会



1 旧中島家住宅に復元された初代かまど



2 本事業により再生した旧中島家住宅2代目かまど



3 初代かまど最後の炊飯
(2015.04.19 再生サポーター説明会)



4 初代かまどに最後の火が入る (2015.05.22)



5 解体前のきよめ
(2015.05.23 ワークショップ1日目 解体・土づくり)



6 解体 一打目
(2015.05.23 ワークショップ1日目 解体・土づくり)



7 解体
(2015.05.23 ワークショップ1日目 解体・土づくり)



8 解体
(2015.05.23 ワークショップ1日目 解体・土づくり)



9 解体
(2015.05.24 ワークショップ2日目 解体・土づくり)



10 解体
(2015.05.24 ワークショップ2日目 解体・土づくり)



11 土づくり 解体した土の粉碎
(2015.05.23 ワークショップ1日目 解体・土づくり)



12 土づくり 粉碎した土を篩にかける
(2015.05.24 ワークショップ2日目 解体・土づくり)



13 土づくり 解体した土を粉碎、篩にかける
(2015.05.24 ワークショップ2日目 解体・土づくり)



14 調査 解体作業を中断し断面を調査
(2015.05.23 ワークショップ1日目 解体・土づくり)



15 解体 最後の一打
(2015.05.24 ワークショップ2日目 解体・土づくり)



16 ワラスサづくり 古畳を解体して藁を取り出す
(2015.06.06 ワークショップ3日目 土づくり)



17 ワラスサづくり 古畳の藁は押し切りで細分しワラスサに
(2015.06.06 ワークショップ3日目 土づくり)



18 ワラスサづくり 古畳の藁は押し切りで細分しワラスサに
(2015.06.06 ワークショップ3日目 土づくり)



19 ワラスサづくり 硬い藁はヨコヅチで叩いて柔らかくする
(2015.06.06 ワークショップ3日目 土づくり)



20 土づくり 前回解体した土も引き続き粉砕
(2015.06.06 ワークショップ3日目 土づくり)



21 土捏ね ワラスサと土をフネに入れ捏ねる
(2015.06.06 ワークショップ3日目 土づくり)



22 土づくり 表面仕上げ用の土の分離、フネから取り出す
(2015.06.06 ワークショップ3日目 土づくり)



23 土づくり 表面仕上げ用の土の分離、フネから取り出す
(2015.06.06 ワークショップ3日目 土づくり)



24 泥団子づくり 積み上げ用の土に加えるワラスサづくり
(2015.07.04 ワークショップ4日目 土積み上げ)



25 泥団子づくり 新しいワラスサを加えて最後に捏ねる
(2015.07.04 ワークショップ4日目 土積み上げ)



26 泥団子づくり 捏ねた土を団子状に纏める
(2015.07.04 ワークショップ4日目 土積み上げ)



27 泥団子づくり ワラスサを混ぜながら泥団子を作る
(2015.07.05 ワークショップ5日目 土積み上げ)



28 泥団子づくり
(2015.07.05 ワークショップ5日目 土積み上げ)



29 土積み上げ 中型に合せて積み上げ、団子どうしをなじませる
(2015.07.04 ワークショップ4日目 土積み上げ)



30 土積み上げ 積み上げた土は手や木鋏でならして成型
(2015.07.04 ワークショップ4日目 土積み上げ)



31 土積み上げ 積み上げた土は手や木鋏でならして成型
(2015.07.05 ワークショップ5日目 土積み上げ)



32 土積み上げ 積み上げた土は手や木鋏でならして成型
(2015.07.05 ワークショップ5日目 土積み上げ)



33 土積み上げ 木鋏で成型
(2015.07.05 ワークショップ5日目 土積み上げ)



34 仕上げ用土づくり
(2015.08.08 ワークショップ6日目 表面仕上げ)



35 表面仕上げ塗り 仕上げ用土を鋁板に取り金鋲で塗りつけ
(2015.08.08 ワークショップ 6日目 表面仕上げ)



36 表面仕上げ塗り
(2015.08.08 ワークショップ 6日目 表面仕上げ)



37 表面仕上げ塗り
(2015.08.08 ワークショップ 6日目 表面仕上げ)



38 表面仕上げ塗り
(2015.08.08 ワークショップ 6日目 表面仕上げ)



39 表面仕上げ塗り
(2015.08.08 ワークショップ 6日目 表面仕上げ)



40 表面仕上げ塗り
(2015.08.08 ワークショップ 6日目 表面仕上げ)



41 表面仕上げ塗り
(2015.08.08 ワークショップ 6日目 表面仕上げ)



42 表面仕上げ塗り
(2015.08.08 ワークショップ 6日目 表面仕上げ)



43 再生された2代目かまどの除幕
(2015.10.12 かまど再生記念事業)



44 伊勢大神楽森本忠太夫組による竈祓
(2015.10.12 かまど再生記念事業)



45 2代目かまどに火が入る
(2015.10.12 かまど再生記念事業)



46 2代目かまど初めての炊飯
(2015.10.12 かまど再生記念事業)



47 2代目かまどではじめて炊き上がったごはん
(2015.10.12 かまど再生記念事業)



48 旧中島家住宅前では伊勢大神楽の上演
(2015.10.12 かまど再生記念事業)



49 講演会 八木透氏(佛教大学歴史学部教授)による講演
(2015.10.12 かまど再生記念事業)



50 事例報告 寺崎正直氏(グループとみじん)による事例報告
(2015.10.12 かまど再生記念事業)

もくじ

カラー図版

旧中島家住宅かまど再生事業写真

旧中島家住宅位置図	2
1. 事業の概要・目的・体制	3
(1) 事業の概要・目的・体制等	3
① 事業の概要・目的	3
② 事業体制・スケジュール	3
2. 旧中島家住宅について	5
(1) 旧中島家住宅の特性	5
(2) 旧中島家住宅の移築復元工事	7
① 移築復元工事の概要	7
② 解体以前の状況	7
③ 移築復元にむけての検討	7
(3) 旧中島家住宅のかまど（ヘツツイ）	10
① 滋賀県のかまどと旧中島家住宅のかまど（ヘツツイ）	10
(4) 旧中島家住宅のかまど（ヘツツイ）の築造	12
① 旧中島家住宅初代かまど（ヘツツイ）の復元	12
② 旧中島家住宅初代かまど（ヘツツイ）の築造	13
③ 栗東市域での土製かまどづくりの工法	14
3. 旧中島家住宅のかまど（ヘツツイ）再生ワークショップについて	16
(1) 事業の概要	16
(2) 再生方法の検討	16
(3) かまど（ヘツツイ）再生ワークショップ	18
(4) かまど再生サポーターの参加動機と結果～市民に活用される開かれた博物館として～	23
① 参加者の年齢層と参加の動機	23
② 再生サポーターから旧中島家住宅を含む今後の活用アイデア	24
4. 事業のまとめ～成果と展望～	29
5. 資料編	31
旧中島家住宅初代かまど、2代目かまど及び栗東市・草津市類例実測図面	31
栗東市・草津市類例基礎データ	36
旧中島家住宅解体時図面	37
旧中島家住宅解体時調査図面	39
旧中島家住宅移築復元時図面	38
栗東市内レンガ・タイル製かまど基礎データ	43

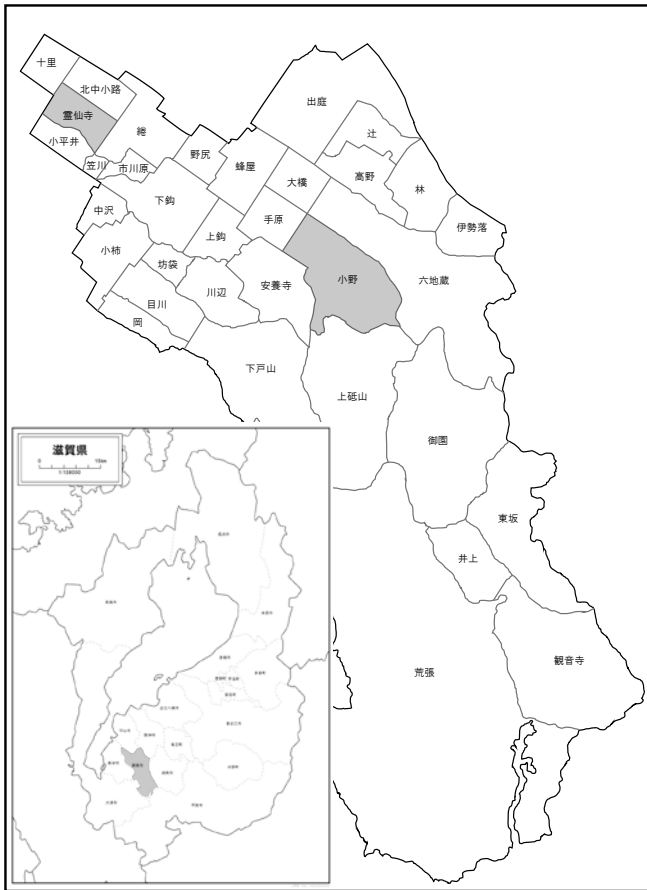
なお、本文の執筆分担、ご協力者についてはP30に記した。掲載した図・表・調査データについてはP46～47に一覧で掲載した。

付録DVD

1. 旧中島家住宅・かまど三次元計測画像
2. 旧中島家住宅かまど再生事業定点映像
3. 旧中島家住宅初代かまど三次元計測図
4. 旧中島家住宅初代かまど実測図面
5. 旧中島家住宅2代目かまど三次元計測図
6. 旧中島家住宅2代目かまど実測図面
7. 旧中島家住宅かまど再生事業紹介パンフレット「ヘツツイ再生ものがたり」
8. 旧中島家住宅かまど再生事業紹介リーフレット「へつつい通信」
9. 旧中島家住宅かまど再生事業紹介PR番組「ほっと栗東」（2015年6月13・20日（土）放送）
10. 栗東市・草津市土製かまど類例三次元計測図
11. 栗東市・草津市土製かまど類例実測図
12. 旧中島家住宅解体時測量調査図面
13. 旧中島家住宅移築復元時設計図面

付録DVDのデータの作成は1～3、5、10が岡本篤志氏（大手前大学史学研究所研究員）、9が栗東市、12、13が吉田社寺並一般建築事務所、それ以外は市民とともに行う栗東歴史民俗博物館創造活動事業実行委員会が行った。

旧中島家住宅 位置図

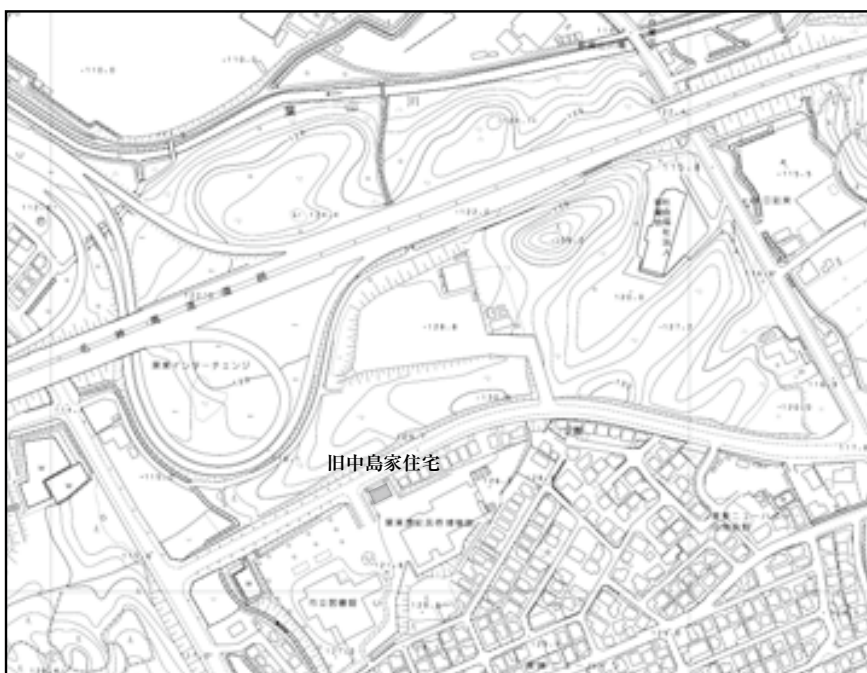


栗東市位置図

小野地区…旧中島家住宅移築復元場所
雲仙寺地区…旧中島家住宅移築前所在地



旧中島家住宅旧所在地周辺地図



旧中島家住宅現所在地 栗東歴史民俗博物館敷地内

1. 事業の概要・目的・体制

(1) 事業の概要・目的・体制等

①事業の概要・目的

市民とともに行う栗東歴史民俗博物館かまど再生事業（以下、かまど再生事業）は、栗東歴史民俗博物館に移築復元されている明治初期の農家住宅、旧中島家住宅の土製のかまど（栗東では“ヘッツイ”“ドヘッツイ”と称される）を再生（解体、再築造）することを目的にした事業である。また、実際の再生作業は市民と共働し、ワークショップ形式で行うことで、旧中島家住宅や栗東歴史民俗博物館に愛着を感じてもらい、栗東歴史民俗博物館が開館以来、運営基本方針として掲げてきた“市民に活用される開かれた博物館”を実現、また市民の自主的な生涯学習活動を支援し、市民に活用される開かれた博物館づくりを基本に、地域とともに歩み、歴史を身近に感じられるまちづくりの推進に寄与する、という栗東歴史民俗博物館が掲げる使命を達成させることも、あわせて目的とした事業である。なお事業は平成 26 年度から平成 27 年度にかけて行い、この事業を行うために“市民とともに行う栗東歴史民俗博物館創造活動事業実行委員会”（以下、実行委員会）を組織した。

事業の概要は、平成 26 年度を調査・ワークショップの期間に、平成 27 年度は平成 26 年度の成果を踏まえて再生作業を行うワークショップの期間と定めた。平成 26 年度は、旧中島家住宅のかまどの実測調査、三次元計測調査と、栗東市・近隣市の類例に対する実測調査・三次元計測調査を行い、この成果について、シンポジウムとワークショップの形で市民に公表した。また並行して実際の再生方法について外部有識者とともに検討を重ねた。平成 27 年度は、実行委員会のよびかけに応じて参加した市民とともに、6 回のワークショップを行い、実際にかまどを解体し、土を作って積み上げ、新しいかまどに再生させた。再生したかまどは養生期間を経た後、平成 27 年 10 月 12 日にお披露目し、このお披露目に会期を合わせた関連展示「湖国のヘッツイさん」を栗東歴史民俗博物館を会場にして開催した。また平成 27 年度のワークショップに参加した市民には、再生したかまどや、旧中島家住宅をどのように使いたいかについてアンケートを実施した。これはこの事業の目的、市民に活用される開かれた博物館、地域とともに歩み、歴史を身近に感じられるまちづくりへの寄与、を実現させるための今後の検討材料として活用しようとするためのものである。

②事業体制・スケジュール

かまど再生事業は市民とともに行う栗東歴史民俗博物館創造活動事業実行委員会で行った。実行委員会は、市民とともに行う栗東歴史民俗博物館創造活動事業を行うために組織したもので、栗東歴史民俗博物館を中核とし、栗東歴史民俗博物館市民学芸員の会（以下、市民学芸員の会）、農業団体 21 東坂、NPO 法人 碧いびわ湖の 4 団体で組織した。各団体の役割は、これまで旧中島家住宅のかまどを利用したワークショップなどで実績のある市民学芸員の会にはその経験を生かした連携を、同家のかまどを利用したワークショップを開催している農業団体 21 東坂には、かまど再生後のワークショップのあり方を、栗東市内の里山で親子遊びを主催する NPO 法人

碧いびわ湖には多世代の市民が楽しめる博物館のあり方の提案や若い世代へのアプローチ方法の提案を分担し、事業を通して市民に開かれた博物館を構築することを目指した。

市民とともに栗東歴史民俗博物館創造活動事業実行委員会

役職	名前	所属する構成団体	役職	氏名	所属する構成団体
会長	松村 浩	栗東歴史民俗博物館	副会長	中井 あけみ	農業団体 21 東坂
副会長	澁江 善光	市民学芸員の会	委員	根木山 恒平	NPO 法人 碧いびわ湖
監事	山内 良則	市民学芸員の会	委員	向 晟光	市民学芸員の会

外部有識者

氏名	所属	氏名	所属等
佐々木 進	栗東歴史民俗博物館元館長	宮奥 淳司	宮奥左官工業 一級左官技能士
明珍 健二	花園大学文学部教授	池野 保	滋賀県教育委員会文化財保護課参事
田中 覚	立命館大学情報理工学部教授	吉見 静子	岐阜女子大学名誉教授
岡本 篤志	大手前大学史学研究所研究員	岸田 知之	ボランティアコーディネーター

平成 26 年度

日程	内容
2014. 04～05	市内各自治会かまど所在アンケート調査
2014. 07. 04	第 1 回 かまど再生事業実行委員会会議
2014. 08. 12	市内レンガ・タイルかまど調査（栗東市荒張）
2014. 08. 12	出庭餅搗き祭るかまど調査
2014. 08. 21	市内レンガ・タイルかまど調査（栗東市東坂・御園）
2014. 08. 22	市内レンガ・タイルかまど調査（栗東市出庭）
2014. 08. 26	市内レンガ・タイルかまど調査（栗東市上砥山）
2014. 08. 27	三次元計測調査（栗東市東坂・井上）
2014. 08. 28	三次元計測調査（草津宿本陣・旧中島家住宅）
2014. 08. 29	市内レンガ・タイルかまど調査（栗東市下戸山）
2014. 09. 03	土かまど実測調査（栗東市井上）
2014. 09. 05	土かまど実測調査（旧中島家）
2014. 09. 11	土かまど実測調査（草津宿本陣）
2014. 09. 13	市内レンガ・タイルかまど調査（栗東市六地藏）
2014. 09. 14	土かまど実測調査（栗東市東坂）
2014. 09. 14	市内レンガ・タイルかまど調査（栗東市上砥山）
2014. 09. 18	土かまど実測調査（草津宿本陣）
2014. 09. 20	土かまど実測調査図面整理
2014. 09. 21	土かまど実測調査図面整理
2014. 09. 23	第 2 回 かまど再生事業実行委員会会議
2014. 10. 19	第 3 回 かまど再生実行委員会会議
2014. 10. 19	かまどワークショップ・シンポジウム
2015. 01. 29	第 4 回 かまど再生事業実行委員会会議

平成 27 年度

日程	内容
2015. 04. 15	かまど再生用土づくり準備（藁スサ作り）
2015. 04. 16	かまど再生用土づくり準備（土取り）
2015. 04. 09	かまど再生事業説明会（かまど再生サポーター対象）
2015. 04. 29	再生かまど外観等確認
2015. 05. 20	第 1 回 かまど再生事業実行委員会
2015. 05. 20	かまど再生事業記録用定点カメラ設置
2015. 05. 23	第 1 回 かまど再生ワークショップ（解体）
2015. 05. 23	解体にともなう実測調査
2015. 05. 24	第 2 回 かまど再生ワークショップ（解体）
2015. 06. 06	第 3 回 かまど再生ワークショップ（土づくり）
2015. 07. 04	第 4 回 かまど再生ワークショップ（土積み上げ）
2015. 07. 05	第 5 回 かまど再生ワークショップ（土積み上げ）
2015. 08. 08	第 6 回 かまど再生ワークショップ（表面仕上げ）
2015. 09. 19～ 2015. 11. 03	関連展示「湖国のヘッツイさん」（於 栗東歴史民俗博物館）開催
2015. 9. 26	関連展示「湖国のヘッツイさん」展示解説会 開催
2015. 10. 12	再生かまどお披露目・講座
2015. 03	第 2 回 かまど再生事業実行委員会

2. 旧中島家住宅について

(1) 旧中島家住宅の特性

旧中島家住宅は栗東市霊仙寺に建っていた農家で、昭和60年度に解体され、平成5年度に栗東歴史民俗博物館の敷地に移築された住宅である。

当住宅は明治初期に、当主の祖父、中島文次郎が分家するに際し、その住まいとして建てられた。



図1 旧中島家住宅 外観

移築に際し、文化財としての保存活用を考え、精緻な痕跡調査と聞き取り調査が行われた。(P9 図5参照)。痕跡調査の過程で、必要に応じて部分的に改造されていたことなどが判明した。それらの資料と考察に基づき、数度にわたり、民家建築の専門家・研究者によって、意見が交わされ、建設当初の形式は茅葺入母屋造素屋建ち整形四間取型であることが明らかになり、この結果に基づき、復元移築された(図2、P10 図6参照)。また、この痕跡調査により、縁側やフロの設置などの数度の改築が行われていることがわかる。

素屋建ちの構造形式は納屋などの小規模建造物には県下によく見られるが、滋賀県南部には一般的な規模の農家にも見られる構造である(図3参照)。

屋根の棟は棟の鞍茅の上に杉皮を葺き、5本の竹で抑えており、屋根本体は茅葺で、所々に鳥よけの貝殻をのせている。

平面型は〈でい〉・〈ざしき〉・〈だいどこ〉・〈なんど〉の4室からなる。

〈ざしき〉と〈なんど〉の妻面に押入れを設けている。分家であるため

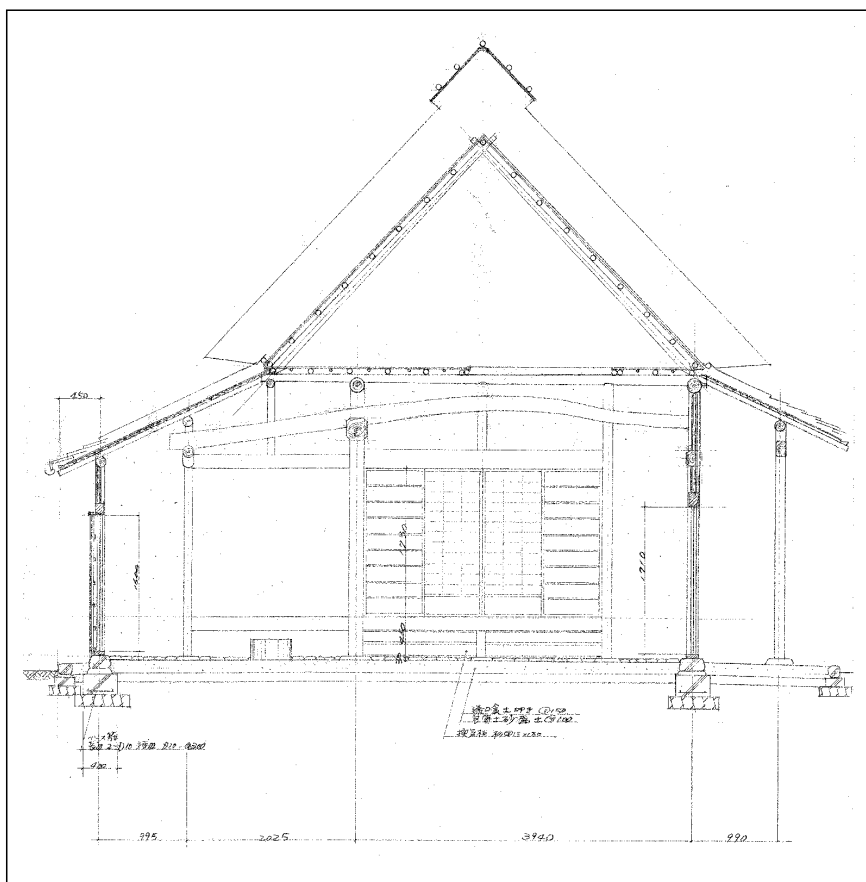


図2 旧中島家住宅矩計図

に、格式ばった床の間を背にした接客の必要がないので、〈ざしき〉にはトコノマはなく、縁側もない。またブツマもなく、天井も張られていない質素なつくりであった。

現在のヘツツイは〈にわ〉の広さからいって大きくみえるが、5つ口のこの形式が湖南地域では一般的であったのであろう。

家業は農業と米屋で、牛は耕作に、米屋は精米と販売を行い、〈にわ〉前面を接客に用い、〈うまや〉を背後に設けた。身分制度の厳しかった江戸時代から間もない明治時代初期の建設であり、本家との関係からも、分家としての在り方をあらわしている。

以上に述べたように、旧中島家住宅はこの地方の伝統的な形式を受け継いだ中規模の茅葺入母屋造素屋建ち整形四間取型で、典型的な分家の住宅である。また、精緻な痕跡調査によって、縁側、フロ、仏壇の設置などの改造の過程を知ることができる。

（吉見静子 岐阜女子大学名誉教授）

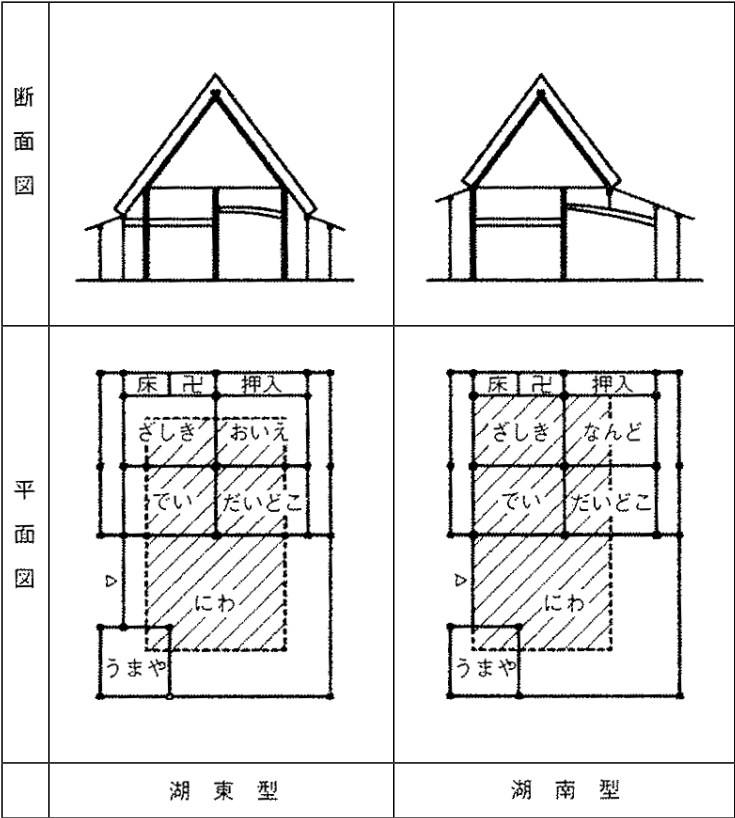


図3 合掌組と平面との関連

(2) 旧中島家住宅の移築復元工事

①移築復元工事の概要

昭和 60 年（1985）、旧中島家住宅は当時の当主、中島常三郎氏（明治 32 年生）から栗東市への寄贈の申し出があり、解体調査が行われた。その後、平成 5 年度中に栗東歴史民俗博物館の敷地へ創建当初の姿に復元し、移築された。創建から解体まで約 100 年が経過する中でさまざまに改変されていたため、平成 5 年（1993）5 月～8 月にかけて部材調査（6 回）や聞き書き調査、移築復元検討会議（2 回）が開催され、元のすがたが検討され、同年 10 月から翌 6 年 3 月にかけて工事が行われ、平成 6 年 5 月に一般公開が始まった。

②解体以前の状況

旧中島家住宅は栗東市霊仙寺に位置しており、嘉永 3 年（1850）生まれの中島文次郎氏が明治初期に建てたと伝わっていた。住宅建築の契機は妻つねとの婚姻で、このとき文次郎が母をつれて分家したとされる。その後、2 代目文三郎氏、3 代目常三郎氏一家が解体される直前まで住居として使用した（P7 図 4 参照）。昭和 60 年に調査を受けた際の状況は次のとおりである（P9 図 5 参照）。

住宅は南北に長く、東を正面とし、入り口が中央より左手にあった。入り口の北側に風呂、南側の便所が配置

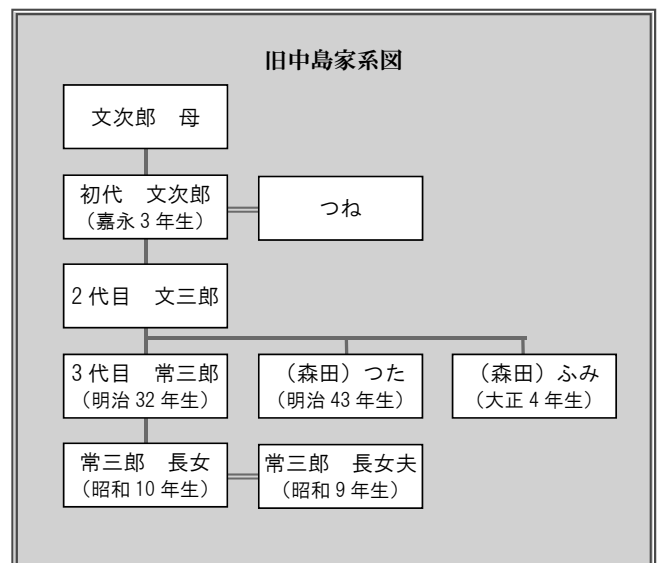


図 4 旧中島家関係系図

されていた。住宅は南半分が土間、北半分が床上部分となり、床上部分は田の字型 4 室構成で、東側にはデイ（6 畳）ザシキ（6 畳）西側にはダイドコ（板間 4・5 畳）ナンド（4・5 畳）が配置されていて、デイとザシキの東面にはエンがついていた。いずれの部屋にも天井板が張られていた。

ザシキの北側には押入れ状の部分があり、一部を床の間にして仏壇を配置していた。ナンドにも北側に押入れがつく。土間からデイに上がる位置にはアグリグチと呼ぶ細長い板敷きの部分があった。

住宅の南半分の土間部分は解体当時、2 面のササラ戸と一部壁によって内部が 4 区画に仕切られていて、ウマヤが土間の南西の角にあった。ウマヤは床が 60cm ほど掘窪めてあり、南面にはカンヌキとよぶ取り外し可能な横木が渡されていて、他の面には板が貼られていた。土間の南面には 2 箇所外部への開口部があり、玄関寄りには引き戸、ウマヤ寄りには開き戸が設置されていた。なお屋根は茅葺で、四方の軒に瓦を葺いていた。

③移築復元にむけての検討

移築復元にむけては後補部分の特定と、創建当初の形状が探られた。解体当時、常三郎氏からの聞き書きから分かる後補部分はエンと天井、土間部分であった。まずエンについて、デイの東側のエンは昭和 22・23 年（1947・1948）頃に、ザシキの東側のエンは明治 32 年（1899）生まれの常三郎氏が子どもの頃の後補、また土間からデ

イに上がる位置にあるアグリグチは明治末年に後補されたことが判明していた。天井はザシキ以外の天井板は後補のもので、デイは常三郎氏が10歳頃（1909年頃か）、ナンドとダイドコ部分は戦後の後補だという。解体時土間部分にあった仕切りは創建当初はなく、ウマヤだけが解体時と同じ場所にあったという。その他、ダイドコの西側に開けられていた窓、ダイドコと土間の境にある建具も当初はなかったことが分かっていた。

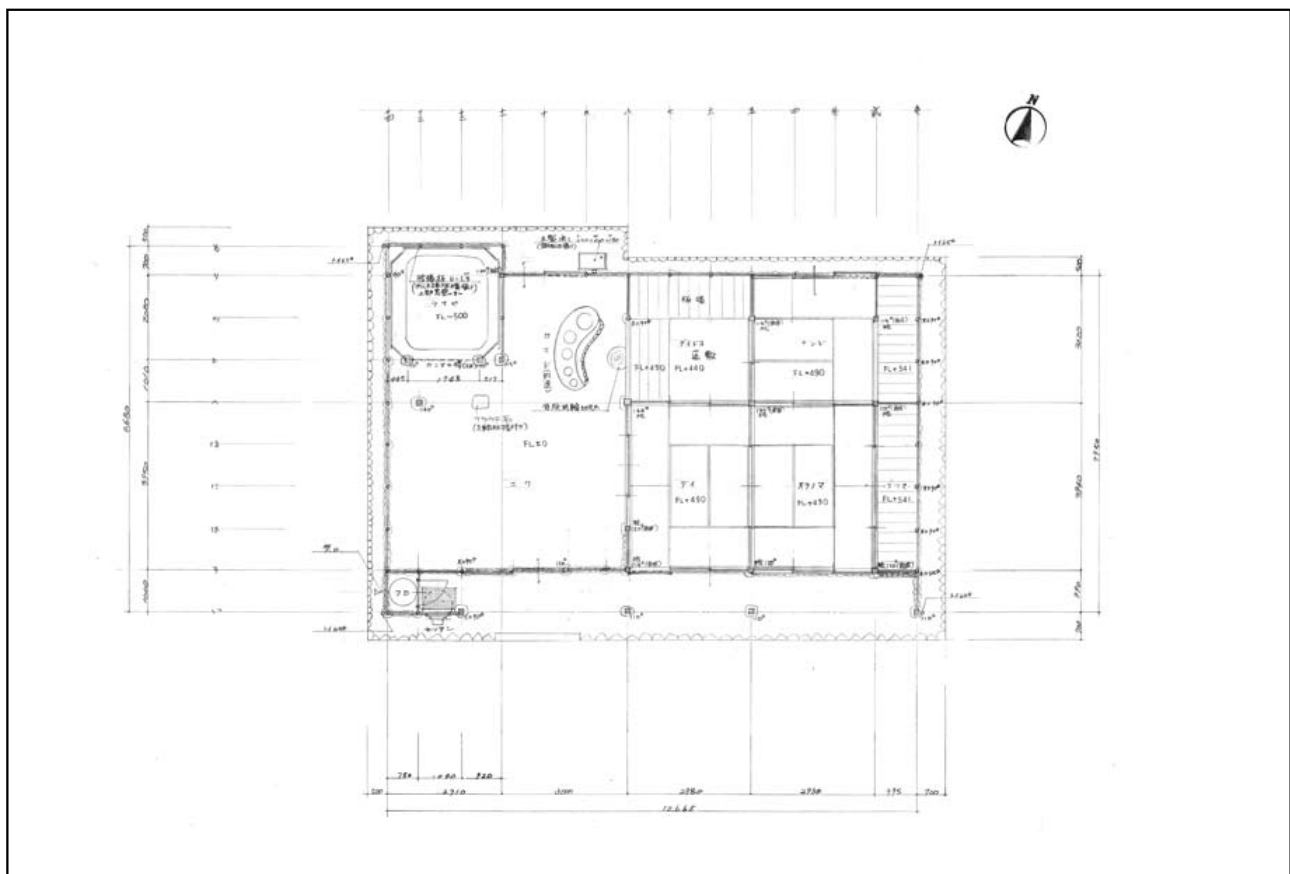
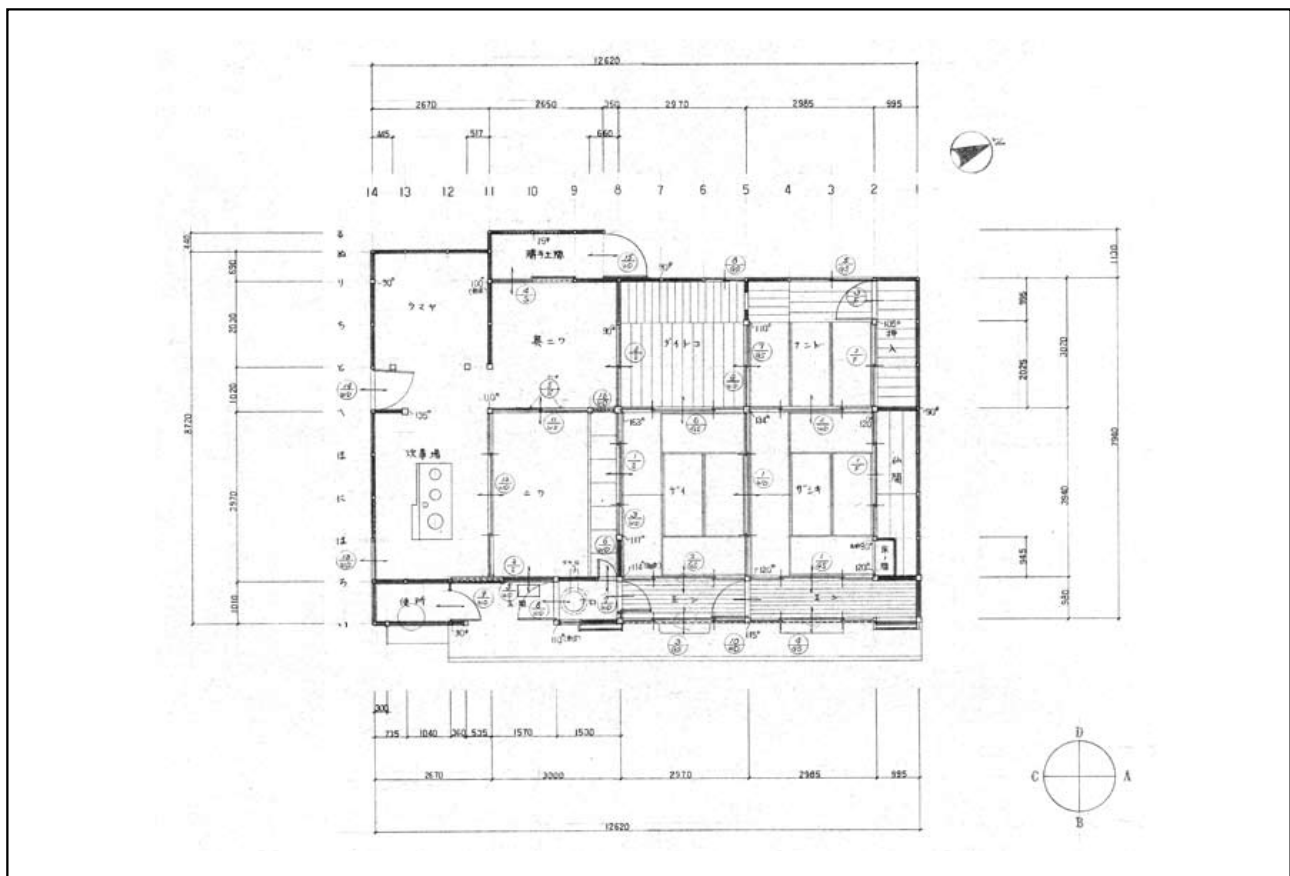
平成5年の部材調査では、常三郎氏の記憶通りデイとザシキ東側のエンについて創建当初のものでないことが確認された。また天井板についてはザシキとデイの天井の回り縁の工法が洋釘を用いたものであることから、常三郎氏の記憶とは異なりザシキも含めた全ての天井板は後補のものであることが判明した。

移築復元検討会議で検討された箇所はいくつかあるが、最も判然としなかった箇所は、風呂と便所の位置であった。部材調査ではいずれも後補の痕跡があり、創建当初の姿でないことは判明していた。手がかりを知る常三郎氏は解体から5年を経た平成2年に亡くなっており、移築復元のため、常三郎氏の妹で、他家へ嫁ぐまで中島家住宅で生活していた森田つた氏（明治43年（1910）生）、森田ふみ氏（大正4年（1915）生）に聞き書き調査が行われた（7月8日、24日に実施）。それによると両氏の記憶では風呂の位置は解体当初と一致していたが、両氏の父、文三郎氏が何度も改修しており、風呂周りの壁が他より白く新しいものであったとの記憶があったため、位置や形状について検討の必要があるということが判明した。検討会議では最終的に、つた氏ふみ氏が霊仙寺地域でよく見たという、家の南側に風呂が配置される場合の例に倣って復元し、湯殿の上がミザラで、小便器は湯殿のくみ出し口に板を立てかけていたという形状とすることが決まった。

その他の検討箇所には痕跡が確認できなかったザシキの雨戸の戸袋がある。この点については霊仙寺では戸袋は戸板を箱状に設けた戸袋に収納するのではなく、最初に収めた戸板が戸袋の外面となる形状のものがみられたという、つた氏ふみ氏の聞き書きに則した形状で復元されることが決まった。

ほかに両氏の記憶では土間の南面の開口部について、記憶になく土間は非常に暗く、牛の出入りは玄関から行われていたという。これに基づき、南面の開口部は後に開けられたと判断され、全面が土壁で復元されることが決まった。なお、土間の間仕切りについては後補であることが確実であったためか検討会議では検討箇所として取り上げられることはほとんどなかった。平成16年（2004）に常三郎氏の跡を継いだ長女夫婦に聞き書き調査したところでは、昭和37・38年（1962・1963）頃に土間を改変し板間とセメント塗りの部分に区切ったとのことであった。ほかに土間には常三郎氏、つた氏、ふみ氏の記憶に基づき、ウマヤとダイドコの間に土製のかまどが復元されることになった。形状については、解体時には3口の土製かまどが想定されていたが、つた氏ふみ氏の記憶にもとづき5口の勾玉型のものが復元されることとなった。

上記のような検討の結果、最終的な復元は図6のように行われることとなった。



年代	内容	拠
1870 年前後（明治初期）	霊仙寺村（栗東市霊仙寺）の中島文次郎氏（1850 年生）が結婚を機に隠居（分家）、村内に中島家住宅を建て、妻つねと母の 3 人で住む。当初は米屋を営み、土間の玄関側半分を仕事場に使う。	A・C
1900～1910 年代頃 （常三郎氏が子どもの頃）	ザシキの東側にエンがつけられる。	A
1900 年代頃	デイ前のアガリグチと袖板が設けられる。	A
1909 年頃 （常三郎氏が 10 歳頃）	デイ・ザシキに天井板が張られる。	A・C
1910 年代	このころにはすでに風呂の位置が玄関左手に位置するようになる。	B
1910～1930 年代 （大正～戦前頃）	一時期ダイドコに畳が 2～3 畳分敷かれる。なお、デイ・ザシキ・ナンドも含めて縁のない畳であった。	B
1942～1943 年頃	牛を飼わなくなる。	A
1945 年～ （太平洋戦争後）	ナンド・ダイドコに天井板が張られる。	A
1947～1948 年頃	デイの東側にエンがつけられる。	A
1960 年頃	煙突付きのタイルカマドを土間玄関側に設ける。	D
1962～1963 年頃	デイと土間の境目に縁を付け、縁から風呂に入れるように改変。	D
1965 年頃	土間を改修。勝手口奥の底下に張り出しの台所を設ける。	D
1985.12.04	解体調査	
1986.02	解体工事 その後部材は草津倉庫に保管される。	
1993.05.13	調査のための部材移送（草津倉庫→旧葉山公民館）	
1993.05.19～1993.06.07	旧中島家復元部材調査（計 6 回）	
1993.06.18	第 1 回 旧中島家移築復元検討会議	
1993.07.09	第 2 回 旧中島家移築復元検討会議	
1993.07.08、1993.07.24	中島常三郎氏妹森田つた氏、森田ふみ氏聞き書き調査	
1993.08.31	設計図面完成	
1993-10.15	旧中島家住宅移築復元工事開始	
1993.11.19	旧中島家住宅移築復元工事 棟上式	
1994.01	三浦平三郎氏によるかまど作り	
1994.01.26	第 3 回 旧中島家移築復元検討会議	
1994.3.25	旧中島家住宅移築復元工事完了	
1994.05	旧中島家住宅 一般公開開始	

*A＝常三郎氏による B＝つた氏・ふみ氏による C＝部材等痕跡による D＝常三郎氏の長女夫婦による

表 1 旧中島家住宅改変履歴及び移築復元にかかる作業内容

(3) 旧中島家住宅のかまど（ヘツツイ）

①滋賀県のかまどと旧中島家住宅のかまど（ヘツツイ）

移築復元された旧中島家住宅の土間には、土でできたかまど、ヘツツイが復元された。復元にあたっての考証、復元作業については後で詳細に述べるとして、ここでは主に滋賀県内の民家のかまどとそこでの旧中島家住宅のかまどの位置づけを行う。

滋賀県は気候や風土から、湖東・湖西・湖南・湖北・甲賀の地域に分けられる。旧中島家住宅が位置する栗東市は、草津市・守山市・野洲市と同じ湖南地域となっている。滋賀県内の民家ではいずれの地域でもかまどが調理施設として設けられてきたが、それぞれの地域によってその設置場所や形態は異なる。以下、滋賀県教育委員会が行なった近世民家の調査に基づいて、地域ごとに特徴のあるかまどを紹介する。

まず県内で最も北に位置する湖北地域でみられるかまどには、イロリと一体となったかまどがある。旧西浅井町 TH 家（24402*以下、番号は滋賀県教育委員会発行の『滋賀県の近世民家』⁽¹⁾での調査番号）、旧木之本町 MK 家（24201）はこの例である。いずれも土間との境界にイロリが設けられていて、その一端に食い込むようにかまどが設置されている。湖北地方は県内でも豪雪地帯で寒い地方として知られる。調理や飲食する際に暖

をとりながら作業ができるよう
 られた工夫だろう。また湖西地域
 では、旧マキノ町在原にも同様に
 土間との境にイロリを置き、そこ
 へ食い込むようにかまどを設置す
 る例や、旧朽木村生杉にも板間に
 切ったイロリに食い込むようにか
 まどが設置されている例がある⁽²⁾。
 このあたりも山間の地域でやはり
 寒冷な気候のもと暖房設備をかね
 てこのようなかまどが作られたの
 だろう。ほかに湖西地域には旧新
 旭町 AS 家（25002）や旧高島町
 KY 家（24902）のように土製と
 みられるかまどが焚口を床上部分
 に向けてアガリカマチにぴったり
 と密着して設置される例がみられ
 る。同様のかまどは湖東地方の旧
 秦荘町 KF 家（22802）、金剛苑
 （22803）にも見られる。甲賀地

方では旧甲南町 SN 家（21703）に土間からアガリカマチに踏み込む形のかまどが確認される。いずれも山間部
 の寒冷な気候との関連からなるだけ家屋の床上部分に近いところへ設置されたのだろう。また湖東地方に含まれ
 る近江八幡市域では、大釜と普段使いのかまどが分離して設置される例も見られる。商家の多いこの地域では、
 大釜は客に見せる設備として考えられていたことによるのだろう。

旧中島家住宅が位置する栗東市を含む湖南地域のかまどの特徴は、土間に独立して設置されることだろう⁽³⁾。
 県内の他の地域にみられるような床上部分に食い込んだり、密着するようなかまどはまず見られない。琵琶湖へ
 とつながる平坦地にある湖南地域は他の地域に較べていくらか暖かく、イロリがある民家もほとんどみられなく
 なる。このような気候の条件がかまどを土間に独立して設置させているのだろう。ほかに湖南地域の特に土製の
 かまどの特徴としては焚口が多いことがあげられる。草津市 NT 家（20602）や守山市 SS 家（20704）のように
 5 口と多数の焚口をもつものめずらしくない。いずれも躯体が湾曲した勾玉型とよばれる形状をしている。勾

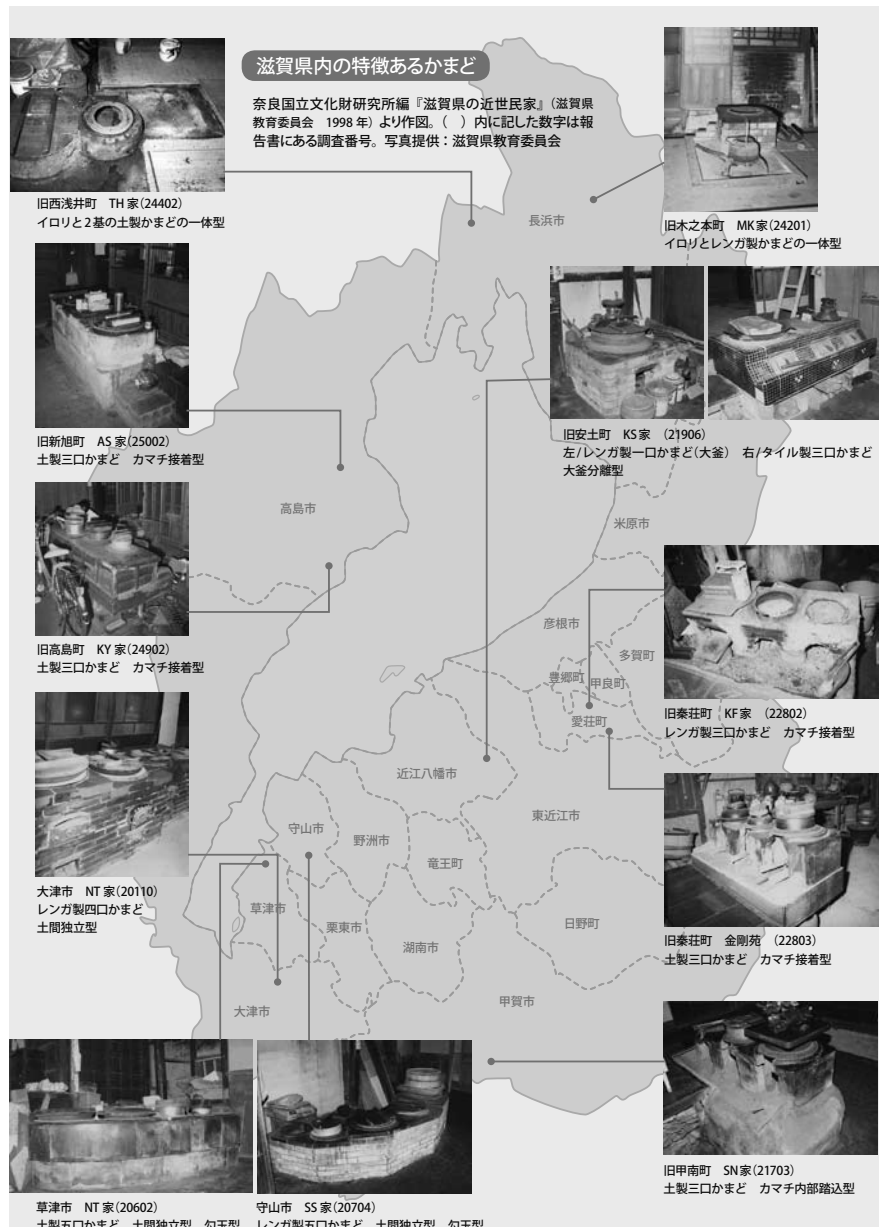


図7 滋賀県内の特徴あるかまど

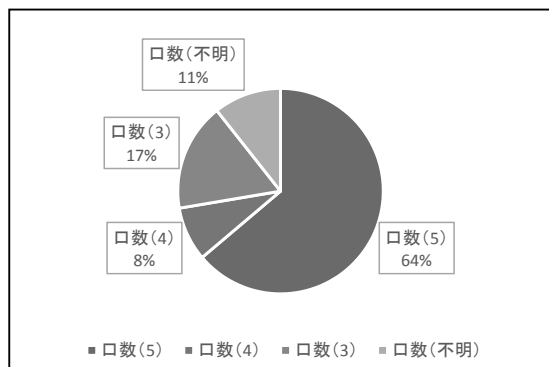


表2 「栗東町民俗調査票」によるかまどの口数

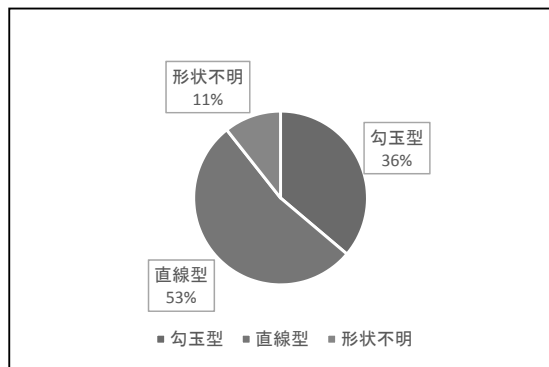


表3 「栗東町民俗調査票」によるかまどの形状

「栗東町民俗調査票」は昭和59～61年に行われた栗東市域の悉皆民俗調査。かまどの口数、形状は調査票の調査項目“住”のうち“かまど”の項目の“用途”“間取図”で採集された情報から作成した。

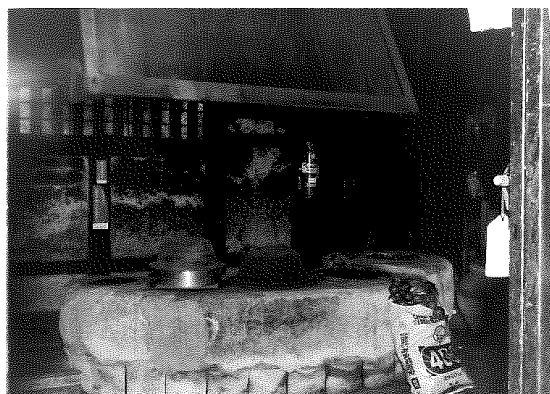


図8 栗東市観音寺に存在した土製勾玉型かまどの例

玉型の利点は多数の焚口がある躯体を湾曲させることで、一箇所に座ったままでそれぞれの焚口の管理が行えるようになることだ。SS家(20704)ではレンガという直線の素材を用いながらも湾曲させて、多くの焚口をもつかまどの使い勝手が追及されている。

旧中島家住宅のかまどは、土間に独立して設置されている。土製で焚口は5つあり湾曲した勾玉型をしている。まさに湖南地域の特徴を兼ね備えたかまどといえよう。

(4) 旧中島家住宅のかまど（ヘツツイ）の築造

①旧中島家住宅初代かまど（ヘツツイ）の復元

平成5年度に旧中島家住宅が栗東歴史民俗博物館敷地内に移築復元された折、土間には土製のかまど（栗東では“ヘツツイ”“ドヘツツイ”と称される）が復元された。ここではその復元に際しての経緯を整理しておく。

平成5年（1993）5月からはじまった部材調査、移築復元検討会議の過程では旧中島家住宅の南半分にあたる土間部分の復元についても検討された。検討と実際の復元作業にあたったのは、移築復元の担当者明珍健二氏（当時の栗東歴史民俗博物館学芸員）と、三浦平三郎氏の両氏である。三浦平三郎氏は栗東市御園に生まれ育った大正3年（1914）生まれの人物で、左官など土製かまどづくりの職人ではない。プロではない三浦氏がかまどの復元に加わったのは、土製かまど作りの経験者だったからだ。湖南地域の土製かまど作りが各家の住人などによって行われることも多かったこと、旧中島家住宅においては部材調査の結果、8割程度が転用材を用いていることが判明していて、初代文次郎氏が左官にかまど作りを依頼したとは考えられなかったことも、三浦氏に依頼した大きな要因であった。なお、湖南地域のかまどは土製かまどから大正末期ごろにレンガ製かまどが登場し、昭和20年代以降タイルかまどが作られるようになる。レンガとタイルのかまどは左官の仕事で、土製かまどのように住人の自作できるものではないとされる。移築復元工事を行った平成5年当時、すでに近隣で土製かまど作りを請け負う左官業者は見つからなかった。

さて昭和 61 年（1986）に解体された際、旧中島家住宅の土間には玄関に近い位置に 3 口のタイルかまどが設置されていた。解体当時からタイルかまどは昭和 35 年（1960）ごろに設置された新しいものであることが分かっており、創建当初のかまどはウマヤとダイドコの中の土間上に、焚口をダイドコに向けて設置されていたことが分かっていた。平成 5 年の復元にあたって、さらに詳細なかまどの形状等を確認するため、同年 7 月、平成 2 年（1990）に亡くなっていた中島常三郎氏に代わって、妹の森田つた氏、森田ふみ氏への聞き書き調査が行われた。

それによると創建当初のかまどの位置についてはウマヤとダイドコの間で間違いなく、素材については全体に土製で焚口の周囲のみに瓦が用いられていたことが分かった。形状は勾玉型で土間から直接立ち上がり、5 つの焚口があったという。鍋釜はダイドコ側からかまどに向かって右から 1 斗・7 升（あるいは 9 升）・5 升・3 升・茶釜が並んでいて 1 斗用の大釜はほかより一段高くなっていたという。また調理や配膳はダイドコのカマチに腰掛けて行っており、その間隔はやや狭かったということであった。

このつた氏とふみ氏の証言に基づいて、ウマヤとダイドコの中に勾玉型 5 口の土製かまどが復元されることとなった。旧中島家住宅の関係者が自作したと想定して、簡素な外観となることで復元の方向性が定められた。

②旧中島家住宅初代かまど（ヘツツイ）の築造

旧中島家住宅の初代かまどは、平成 5 年 10 月から行われていた建物の復元工事と並行して行われ、平成 6 年 1 月中、数度に亘って作業が行われた。この時期が選ばれたのは、かまど作りは節分までに行うという栗東での慣わしに則したこと、移築復元工事の土間部分の作業に合わせてのことであった。

初代かまど作りは主に三浦平三郎氏によって作業が行われ、明珍健二氏が補佐する形で行われた。作業手順はそれまでの三浦氏の経験に基づいて行われ、土の積み上げ→乾燥→積み上げ→全体の成型・焚口の成型→乾燥→表面仕上げの順に行われた。以下、三浦氏による各工程を紹介する。

積み上げ→乾燥→積み上げ

はじめに鍋釜を土間に置きそれぞれの位置を決める（図 9）。それぞれの鍋釜に合わせて馬蹄形に 10cm 程度積み上げる（図 10）。土は 5cm 程度に刻んだワラスサを混ぜ込んで寝かせたものを用いる。土の上面に割瓦を差し込んで、さらに 10cm 程度土を積み上げる。全ての口でこれをくり返し（図 11）、予定の高さの半分程度積み上げ、

ここで一旦 1 週間程度、乾燥・養生させる。その後同じ要領で上半分の土を積み上げ、さらに 1 週間程度乾燥させる。なお、割瓦を入れるのは上下の土の接続と芯材とするために入れるもので、昭和 59～61 年（1984～1986）



図 9 鍋釜を置き設置場所を決定



図 10 馬蹄形に土を積みむ



図 11 約 10cm ずつ積み上げる

の「栗東町民俗調査票」で採集された栗東市域の土製かまど作りのひとつの手法として下戸山・上鉤で確認されている（表 4）。

全体の成型・焚口成型

馬蹄形に積み上げたそれぞれの口と口の間にある扇型の部分を間を埋めるように土を塗って背面を平らに成型する（図 12）。続いて焚口側の成型に移る。焚口は平瓦を半分に切り短冊状にしたものを鳥居型に組んで成型する（図 13）。焚口の上面にあたる鳥居の上部分は瓦のほか平



図12 背面を整える



図13 瓦を芯に焚口を作る

らな石材も用いて臨機応変に成型する。鳥居型は土で塗り込める。焚口の周囲、火袋を水で塗らした手で撫で付けて成型し、表面を滑らかにさせる。全体にも塗らした手で撫で付けて成型していく。焚口前に川原石を並べて灰出し部分を作り、ここで一旦、1週間程度乾燥・養生させる。

表面仕上げ

化粧塗りともいい、表面全体に仕上げ塗り用の土を塗る工程。混ぜ込むワラスサの細かい土を用いる。仕上げ塗りでは左官が用いる鏝や手箒を道具として用い、全体が滑らかになるように仕上げる（図 14）。三浦氏によると、この工程だけは正期以降は左官に依頼して行うことも多かったという。



図14 仕上げ用の土で表面を整える

③栗東市域での土製かまどづくりの工法

栗東市域における土製かまどづくりの工法についてもここで纏めておきたい。昭和 20 年代ごろには途絶えたと考えられる、栗東市域での土製かまどづくりの工法を知るには、「栗東町民具調査台帳」によるもの（P15 図 16）、『栗東の歴史 第 1 巻～第 5 巻』（1988～1995 年 栗東町）を編さんするため昭和 59～61 年に行われた栗東市域の悉皆民俗調査による「栗東町民俗調査票」⁽⁴⁾がある。「栗東町民俗調査票」は、衣・食・住・生産・信仰・社会生活など多岐にわたる項目が調査票

地区名	工法など	分類
辻 越	中ねばの土を使う、上塗りには柔らかい土、“テンコロ”を作る。	A
蔵 町	材料は山の土（赤土）をワラスサに入れ、レンガのように固める（イッタチ）たき口には石を積む。	A
中 村	職人がおり、土（粘土状）を積んで築く。	B
美ノ郷	山からとってきた粘土からイッタチというブロック状のものを作り、それをつみあげ形を作り、その上から土をぬって固める。	A
出庭中	他の床土を使用、切わらを入れこね、レンガ状にかさね作る。自家製。	A
辻	田の土を利用	C
出庭本郷	田のハザコ（おこしたウネ）の下の土を使用。イネワラをまぜ竹を芯にして作る。	B
目 川	目川池の底土をこねて作った。	C
岡	材質は、まず下に瓦をひいてあって、その上にレンガ状の土を積み上げ、塗り込めてあった。	A
下戸山	土と土の間に瓦を入れて補強。	B
上 鉤	ねん土とねん土の間に瓦を入れて補強	B
蓮台寺	田の土を利用	C
小 柿	カワラクズ、土で左官が作る。	B
新屋敷	ワラスサを混ぜた土クドであった。	C
北中小路	ワラを芯にし、田の土をねり、左官が作る。	B
十里 1	左官が作る土。オオギ型に作り火が燃き易い（ママ）にした。一ヶ所から火の調節ができるよう。	C

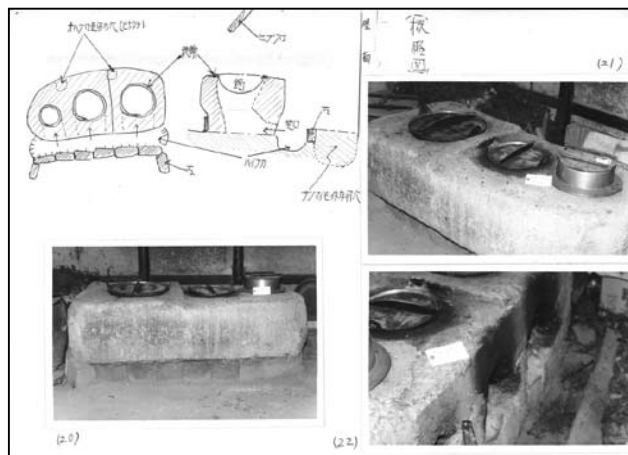
*分類 A=レンガ積み上げ B=泥団子積み上げ、C=不明
*調査票に記された通りに記しており、誤字と推測されるものは（ママ）とした。

表 4 「栗東町民俗調査票」による栗東市域での土製かまどの工法

によって調査されたもので、かまどはそのうち“住”の調査票の一項目として“名称”“用途”“場所”“かまどの神”“材質・構造”が調査されている。またかまどの用途の説明や、母屋の間取りのなかにかまどの簡略な図が採集されている場合がある。土製かまどの作り方についての項目はないが、“材質・構造”の項目で採集されている場合がある。直接的に作り方を調査したものではないので、内容は粗密あるが16地区から採集されている(表4)。これによると栗東市域での土製かまどは大きく2つの方法がある。ひとつは“イッタチ”などとよばれる土をレンガ状に固めたものを積み上げる方法(5地区)、もうひとつは泥状の土を積み上げる方法である(6地区)。レンガ状の土を用いる場合はこれが躯体の芯になり、そのまわりを泥状の土で塗り固めて成型する。また泥状の土を積み上げる場合は、柔らかな材料を積み上げる工夫として、補強材に瓦を用いる(下戸山・上鉤)、藁や竹材を芯材として用いる(出庭本郷・北中小路)などの手法が採られている。三浦氏の経験に基づいた旧中島家住宅の初代かまどづくりは泥状の土を積み上げ、瓦を補強材として用いる手法と合致していて、いくつかある栗東市域で行われていた土製かまどづくりと矛盾のない手法が採られている。



図15 旧中島家住宅初代かまど断面図



台帳に記された聞き書きデータ

話者：A・T氏(上砥山川南 大正2年生)

話者の母親が昭和15~16年頃自ら作ったもの。土製、腰部に平瓦をまわす。ドベツツイをつくるには新しい土を山よりとって来てつくる。古い壁土等を用いることはしなかった。焚口は東もしくは南向きにもうけ、焚口内部を若干ふくらます事により煙が屋内に流入せずナカニワのドベツツイ上部にもうけられたヒブクロへ上手に流れる様した。また焚口の手前は若干掘りくぼめ灰をかき出しやすい様する。ハイブカの前には石を並べ、ここに中座して火を炊く。又、この所はしばしば穴をほりスリヌカを入れてサツマイモの種イモをまぜ、ムシロを敷いて種イモの保存を行った。この場合人はムシロの上に乗る。なおこのドベツツイは三口で大きい方より五升鍋(御飯、牛のカイバ用)、三升鍋(汁物、おかず用)、湯釜をかける。又、昔はオハグロツボを別に横に穴をほり入れていたという(このベツツイにはない)

その他、家つき娘の事を「ドベツツイ」と称する事がある。

図16 「栗東町民具台帳」に採集された自家製の土製かまど(法量:長さ160cm 奥行79cm 高さ58cm)の例

《註》

- (1)『滋賀県の近世民家-滋賀県近世民家調査報告書-』(滋賀県教育委員会 1998年)
- (2)古見静子『古民家は語る 受け継がれてきた暮らし』(新評論 2013年)
- (3)菅原千華「カマドの近代化-「ドベツツイ」から「三和かまど」へ」(『栗東歴史民俗博物館紀要 第11号』栗東歴史民俗博物館 2005年)
- (4)「栗東町民俗調査票」は昭和59~61年(1984~1986)に、栗東市が市内全域、計46地区に対して行った悉皆民俗調査。『栗東の歴史』(栗東町 1988~1995年) 編集のための調査で、調査者は本文を担当した執筆者から、学生アルバイトまであり、その採集内容には粗密がある。ただし明治生まれの話者が多く、現在では採集不可能な内容も多く含まれ、上記の点を留意しながら取り扱う必要はあるが、貴重な資料となっている。

3. 旧中島家住宅のかまど（ヘッツイ）再生ワークショップについて

(1) 事業の概要

平成 26～27 年度に行った旧中島家住宅かまど再生事業のうち、かまど再生（解体・再築造）にかかるワークショップ（以下、かまど再生ワークショップ）は平成 27 年度に行った事業である。なお実際の再生に携わる市民は平成 26 年 10 月 19 日に開催したシンポジウム以降に募集した。“かまど再生サポーター”（以下、再生サポーター）と呼ぶ市民は、滋賀県・京都府下の 8 市から 89 名が応募があった。

市民の手で再生させることにした理由の一つは“市民に開かれた博物館”を実現させる手段として、もう一つは創建当初の旧中島家住宅のかまどが住人などプロではない人物によって築かれたと考えられていたためである。旧中島家住宅に住人がいない現在、利用者である市民を住人に見立て、プロではない“住人”が作ったかまどの再生と、それによる旧中島家住宅、栗東歴史民俗博物館への愛着の創出を目指したのである。ただ、再生サポーターだけで実現させるのは困難が予想されていたため、土製かまど作りを手がける外部有識者の宮奥淳司氏（宮奥左官工業 一級左官技能士）に作業の指導にあたっていた。ほかに、ワークショップでの再生サポーターの活動を補助には実行委員会を構成する各団体の構成員があたり、実行委員会と再生サポーターとの調整には、外部有識者の岸田智之氏（ボランティアコーディネーター）があたった。

(2) 再生方法の検討

再生方法については主に平成 26 年（2014）7 月 9 日、9 月 23 日、10 月 19 日、平成 27 年（2015）1 月 29 日、5 月 20 日に行った実行委員会等で検討を行った。前提の条件はいくつかあり、かまどの外観・工法については栗東市域の土製かまどとしての資料的価値を損なわないこと、年齢に制限を設けない市民を募集して行うワークショップとして実施可能な方法、が主な条件であった。

前者の栗東市域の土製かまどとしての資料的価値を損ねない外観・工法については、旧中島家住宅の移築復元の際の初代かまど作りの情報の整理を行った。初代かまどについては移築復元を担当した明珍氏に確認したところ、明治から大正期の旧中島家住宅に設置されていた土製かまどの情報を中島家縁者（森田つた氏、森田ふみ氏）から聞き書きして作られたものであることが確認できた（P13）。ほかに栗東市域の土製かまどの情報を「栗東町民俗調査票」を整理し、三浦平三郎氏による初代かまどが、いくつかある栗東市域の土製かまど作りと矛盾しない工法で作られていることを確認した。なお初代かまどの高さについて、明珍氏からは、栗東市域ではダイドコのアガリカマチの高さより低くなると、「家の女性たちの発言力が強くなりすぎる」とされており、本来もう少し高く作る予定で少なくともカマチよりも天面を高くすべきであったが、用意した土の量との関係から実際にはそれより低くなっているということが確認できた。

アガリカマチ（約 52cm）より高いという条件に則し、現状のかまど（約 38cm）より約 20cm 高くするシミュレーションを外部有識者の田中覚氏（立命館大学情報理工学部教授）にいただいたところ、縦長の外観とな

り違和感を伴うものとなった（図 18）。そこで宮奥氏により、かまどの躯体を現状より厚みを持たせることで解消することが提案された。この提案をシミュレーションしたものが外部有識者の岡本篤志氏（大手前大学史学研究所研究員）が作成された、図 19 で、同氏がこれまでに調査された旧中島家住宅の建造物データと合わせて確認したところ、違和感がかなり解消され（図 19 付録 DVD データ 4）高さを 20cm、厚みを 15cm 程度厚くすることにした。厚みによりダイドコとの間が狭くなるため、茶釜を軸にウマヤ側へずらして設置することにした。



図17 旧中島家住宅 初代かまど

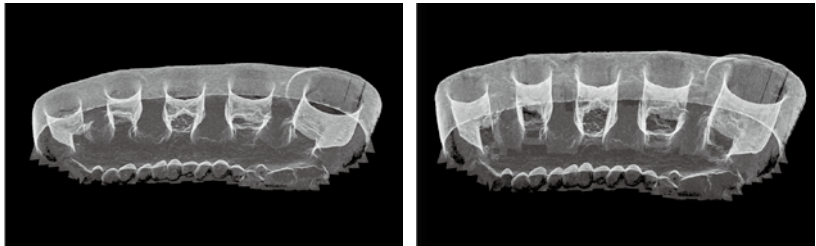


図18 旧中島家住宅 初代かまどの三次元計測図(左)と高さのみ20cm上げた予想図(右)
(画像作成：立命館大学情報理工学部田中覚研究室 三次元計測：岡本篤志氏)

なお 2 代目のかまどには初代のかまどの土を再利用し、不足する分については新たに土を作ることにしていた。初代のかまどの体積は三次元計測調査の結果から 0.5 m³～0.6 m³程度になることが分かっており、そのうち半分程度が再利用可能であろうと予想された。また高さと厚みを上げると 0.7 m³程度の土が必要になることが予想され、新たに 1 m³程度の土の用意が必要であると分かった。

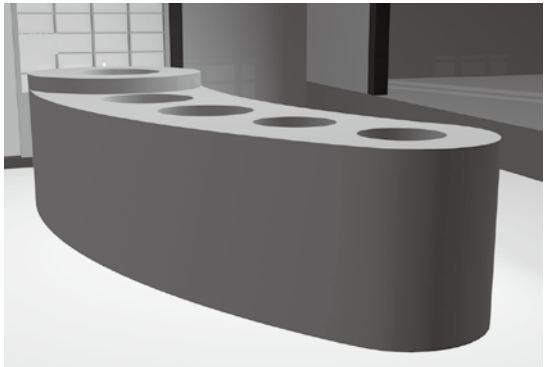


図19 厚み15cm、高さ20cm上げた予想図
(三次元計測・画像作成：岡本篤志氏)

土を積み上げる工法について栗東市域では土をレンガ状に固めて積み上げる工法と泥を積み上げる工法の 2 工法があることが判明したが（P14 表 4）、旧中島家住宅創建当初のかまどの築造方法がいずれの工法であったか資料がないなかでは、三浦平三郎氏も移築復元当初に採用した泥を積み上げる工法に則してでよかろうという判断がなされた。

また年齢制限のない市民の手で無理なく行う方法として、泥状の土を積み上げる際に中型を用いてこの周囲に土を貼り付けていく工法を採用した。この点は三浦氏の工法と異なる点である。なお中型を用いることで三浦氏が土と土の接着と補強に用いていた割瓦を入れる工法については、あえて必要はないとして採用しなかった。上記のことから表 5 の日程と工法になった。

時期	ワークショップ日程	工程	材料・工法など
4 月中旬	-	土づくり	土を発酵させるためのプール状の“フネ”を木枠を組立て作る。市内の田の土を採取、ワラスサと混ぜて土づくりを行う。以後、土積み上げ作業まで週 1 回程度混ぜ合わせて発酵させる。作業は実行委員会主体で行う。
5 月上旬	1 日目 2 日目	かまど解体・土づくり	初代かまどを解体。解体した土を再利用するため篩にかけ、土とそれ以外に分け、分離した土はフネに入れ、発酵させる。
6 月上旬	3 日目	土づくり	発酵させた土に、ワラスサを加えて土を捏ね、さらに発酵を進める。
7 月上旬	4 日目 5 日目	土積み	フネで発酵が進んだ土を泥団子にしながら積み上げる。一定の高さまで積み上げたら乾燥させる。
8 月上旬	6 日目	表面仕上げ	1 ヶ月程度乾燥させたかまどの表面を粒子の細かい土で塗り上げ仕上げる。

表 5 ワークショップの工程案（平成27年 1 月作成）

(3) かまど（ヘツツイ）再生ワークショップ

実行委員会による土づくり（4月15日、16日）

初代のかまどから再利用される土と2代目のかまどに必要な土の量との不足分の土を実行委員会で用意することになった。土は栗東市下戸山の田んぼから採取したものに、古畳を解体したワラスサを混ぜ込み発酵させて作ることになったが、発酵にはある程度の時間が必要なので、かまど再生サポーターによるワークショップに先駆けて、実行委員会で準備を行うことになった。

土づくりのために旧中島家横にある畑の脇に、2m×4m、深さ40cm程度の木枠にブルーシートを張って作った左官業で“フネ”とよばれるプール状の型を用意した。田んぼから小型のショベルカーで採取した土約1m³と、用意した古畳4畳を解体して長さ5cm程度に切ったワラスサを1畳分程度入れ、左官用の砂90kg、水を入れて捏ねた。この後、積み上げ工程に至るまで週1回程度、ワラスサを足しながら実行委員会によってフネのなかの土を捏ねる作業を行い、土を発酵させた。また、土の積み上げ作業に至るまで、主に排水などで水分量の調整を行った。

かまど再生サポーター向け事業説明会（4月19日）

市民から応募のあったかまど89名のかまど再生サポーターを対象にした事業説明会を実施した。工程ごとの作業内容のレクチャーを行うとともに、参加する日程の調整を行った。ワークショップは各日程、午前・午後で入れ替え制とし、希望する日程ごとに登録してもらう方法を採用した。これは作業が参加者に行き渡るよう、大人と子どもの人数が片寄り過ぎないように調整が必要であったためである。

かまど再生ワークショップ（第1回・第2回） かまど解体・土づくり（5月23日・24日）

初代のかまどを解体した。取り壊す前には栗東市域で行われてきた、塩や酒を用いての清めを行った。その後再生サポーターによりハンマーを用いて躯体を解体した。解体した土から、躯体に入れられていた割瓦を取り除いて篩にかけてワラスサなども除去した後、残った土もハンマーやトンカチを用いて細かくし2代目のかまどに再利用できる状態にした。なお、火袋の表面や床面は長年火を受けてきたことによって赤く変色・変質していた。土は素焼き状態になり、水を含ませて捏ねても纏まらない状態で、再利用には不向きなものとなっていた。赤い素焼き状に変質した部



図20 実行委員会による土づくり作業(土採取)



図21 実行委員会による土づくり作業（フネのなかでの土捏ね）



図22 初代かまどの解体



図23 解体した土を細分して再利用できる土へ

分に含まれていたワラスサは高熱による影響がほとんど確認できなくなっていた。再利用できない部分が予想以上に多かったため、後日実行委員会で1 m³程度の土を採取し追加した。

このワークショップでは、茶釜側から解体を始め、1日目で3口を解体、2日目は残りの2口を解体した。解体中には作業を一旦とめて、断面の調査を行った。

かまど再生ワークショップ（第3回） 土づくり（6月6日）

フネに土とワラスサを入れて捏ねる作業を行った。またかまどの床面を調整し、2代目のかまどを設置する場所を決める作業も並行して行った。床面は予想以上に熱を受けて傷んでおり、土間の高さから約10cm程度の深さは解体作業の際に除去せざるを得なかったため、予定にはなかったが三和土を復旧して調整することが必要となり、このワークショップの際に作業を行った。床面の三和土は土、砂、石灰を混ぜたものを叩き締めて調整した。

さて土づくりは1日目2日目のワークショップで解体した初代のかまどの土を細かくする作業を引き続き行い、ワラスサは古畳1畳を解体して中からワラを取り出し、押し切りで5cmと2cmに刻んで作った。土とワラスサはフネに入れ、あらかじめ実行委員会で用意していた土とともに捏ねた。この作業のなかで、後の表面仕上げのワークショップで必要になる土約0.1 m³をフネから分離して取り置いた。なお分離の際には混ぜ込んだワラスサを取り除いた。これは表面仕上げの土は先に入れた5cmのワラスサでは粗くなるため、分離した土にはこの日刻んだ2cmのワラスサを後日に混ぜ込んだ。

かまど再生ワークショップ（第4回・第5回） 土積み上げ（7月4日・5日）

4月から発酵させていた土を積み上げてかまどの形にする作業を行った。積み上げる際にはそれぞれの鍋釜の直径に合わせた円筒状の中型を各口に置き、その周りに



図27 ワラスサを加えながら土を団子状に纏める



図28 中型のまわりに泥団子を積み上げて成型

団子状にした土を積み上げて成型した。泥団子はおおよそ直径15~20cm程度の大きさで、団子状にまとめる際には5cm程度に切ったワラスサを加えた。このタイミングで予定外に新たにワラスサを加えたのは、指導してくださっていた宮奥氏によると、若干柔らかめに仕上がっていた土の水分の調整と、土の強度を上げるためによい

という理由だという。中型に合わせて積み上げた土は、泥団子同士が接着するよう、木でできた鰻、木鰻で均した。



図29 瓦を鳥居に組んで焚口を成型



図30 土の積み上げが完了

なお予定の3分の1程度の高さまで土を積み上げたところから焚口の調整を行った。焚口の調整は熨斗瓦を縦に半分に切り、短冊状にしたものを使用した。初代のかまどと同様に鳥居型に瓦を組み、その回りを土で塗り込めた。熨斗瓦は2種用意し、焚口の両脇に長さ34.5cmのものを、上面には長さ26.5cmのものを使用した。初代のかまどで用いた平瓦より大きい熨斗瓦を用いたのだが、その理由はかまどそのものがより高くなり、それに伴って焚口も縦により長くなるためである。なお、焚口も躯体に合わせて縦に長くしたのは、吸気と排気の空気の流れを初代より効率的にするためである。初代のかまどは平瓦の高さに制約されて焚口がやや狭く、吸排気が効率よく行えていなかったのだ。

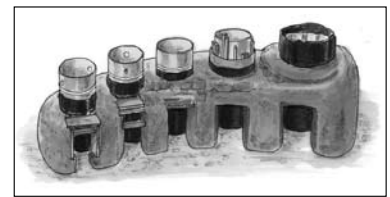
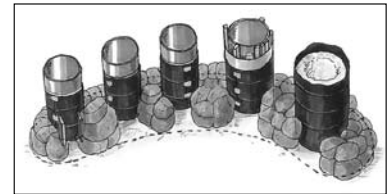


図31 土の積み上げ方と焚口の作り方

(上) 出来上がりの寸法に合わせて泥団子を積む
(下) ①発泡材で両側面の瓦がずれないように支えをする②天面側は瓦2枚で厚みを調整し、両側面の瓦を土で塗り込む③④天面に柔らかめの団子を積んで表面をなじませる⑤上塗り前に土台をととのえる

かまど再生ワークショップ（第6回） 表面仕上げ（8月8日）

かまどの表面を粒子の細かな仕上げ用の土で塗り上げた。仕上げ用の土は第3回土づくりのワークショップで取り分けておいたものと、第4回・第5回の土の積み上げワークショップ後にフネに残った土を使用した。取り分けていた土は2cmに刻んだワラスサを適宜継ぎ足して発酵させていたもので、左官業ではノロとよぶものだ。残った土、ノロ、砂、2cmに刻んだワラを混ぜ合わせ、適宜水を足しながら滑らかな仕上げ土を作る。こうして作った仕上げ用の土を金鰻でかまど表面に塗りつけ、全体が滑らかになるように撫で付ける。土を塗りつける前には、大きなブラシ状の水刷毛でかまどを濡らし、仕上げ土が効率よく接着するよう整える。全体が滑らかになれば、鍋釜の掛け口にカナワ・カマンジョなどとよばれる釜鰻を水平になるように置いて周囲を調整する。釜鰻は仕上げ用土が乾燥すると同時に置いた場所に固着し固定される。また、かまど前に石を並べ、灰出し部分を区切る。なお石は初代のかまどの灰出し部分で用いたものをそのまま使用した。

仕上げ塗りの終了後は1ヶ月程度養生させ、乾燥させた。



図32 表面の仕上げ塗り



図33 鍋釜の掛け口の調整

日程	内容	備考
2015. 04. 15	木枠にてフネづくり。古畳 4 畳のうち 3 畳を解体。	実行委員会
2015. 04. 16	栗東市下戸山の田んぼより約 1 m ³ の土を採取。フネにて畳約 1 畳分のワラスサ、水と混ぜ合わせる。土上部には落ち葉除けネットを張る。	実行委員会
2015. 04. 19	かまど再生事業説明会。	ワークショップ
2015. 04. 23	捏ね直し作業。左官砂約 100kg を混ぜる。	実行委員会
2015. 04. 29	捏ね直し作業。発酵促進のため、土上部にブルーシートを載せる。	実行委員会
2015. 05. 06	捏ね直し作業。ワラスサ追加 (1. 50lポリ袋に 2 杯分)	実行委員会
2015. 05. 20	捏ね直し作業。	実行委員会
2015. 05. 23～24	第 1 回・第 2 回ワークショップ。初代かまどの解体、土づくり作業	ワークショップ
2015. 05. 29	捏ね直し作業。	実行委員会
2015. 06. 06	第 3 回ワークショップ。土づくり。初代かまどからの再利用土、ワラスサ (畳み約 1 畳分) を投入し、捏ね直し。フネより仕上げ用土として 0. 1 m ³ 取り分ける。	ワークショップ
2015. 06. 10	土追加。栗東市下戸山の田んぼより約 1 m ³ の土を採取し、フネに投入。土を捏ね直す。フネへの雨水の流入を防ぐようにする。	実行委員会
2015. 06. 13	フネの内部の水分量が多く、この日よりフネの四隅を解体して数 cm 開け、水を抜く。	実行委員会
2015. 06. 16	捏ね直し作業。ワラスサ追加 (1. 50lポリ袋に 2 杯分)、左官砂約 220 kg追加。	実行委員会
2015. 06. 18	フネの 1 辺を解体。水抜きをさらに促進させる。この日より第 4 回ワークショップまで毎日土から浮き出した水分を汲み出す。また取り分けた仕上げ用土も土が沈殿し、浮き上がった水分についてはこの日から適宜排水し、水を抜いた。	実行委員会
2015. 06. 20	フネの土内部に排水パイプ 3 本を入れ、水抜きをさらに促進させる。	実行委員会
2015. 07. 04～05	第 4 回・第 5 回ワークショップ。土の積み上げ作業。土の成型前に左官砂 30kg を追加。かまどの形に土を積み上げ、成型する。	ワークショップ
2015. 07. 06～ 2015. 08. 07	積み上げたかまどの養生、扇風機の風をあてての乾燥期間。	実行委員会
2015. 07. 23	かまど躯体より中型抜き取り。	実行委員会
2015. 07. 26	かまど躯体に生じた小さな窪みに土を充填。	実行委員会
2015. 08. 08	第 6 回ワークショップ。表面仕上げ塗り作業。仕上げ用の土は第 3 回ワークショップで取り分けた 0. 1 m ³ と、土積み作業で残ったおおよそ同量の土に左官砂約 50 kg と 2cm 以下に刻んだワラスサを混ぜた。	ワークショップ
2015. 08. 11	宮奥淳司氏によるかまど表面最終仕上げ。	宮奥淳司氏
2015. 08. 12～ 2015. 10. 11	かまどの養生、乾燥期間。	実行委員会
2015. 10. 12	2 代目かまどのお披露目、使用開始。	—

表 6 かまど再生への作業工程 (実行委員会による作業も含む)



図34 土の捏ね直し



図35 フネの四隅から水を抜く



図36 水抜き用の排水パイプをフネに入れる



図37 躯体の乾燥後、中型を外す



図38 躯体の乾燥

2代目かまどのお披露目

8月8日の第6回ワークショップで表面仕上げを行ったかまどは、その後約2ヶ月、毎日扇風機の風をあてて養生、乾燥させた。乾燥が進むと砂分を多く含む影響か、表面はやや白っぽくなった。

使用を始めたのは10月12日で、開始にあたっては塩と酒で清めた後、伊勢大神楽（国指定無形民俗文化財）による竈祓いと神楽の上演を行った。栗東市域は表7のように伊勢桑名（三重県桑名市）に本拠を置く、伊勢大神楽の檀那場となっていて、かまどのある家は家の庭先での神楽のほか、かまどの前で竈祓いを受けることで1年間のかまどの安全を願う慣わしがある。旧中島家住宅の現在の所在地、栗東市小野と元の所在地、栗東市霊仙寺はいずれも平成27年（2015）には森本忠太夫組が回檀する地域であり、慣例にならって森本忠太夫組の竈祓いを受けた後、火を入れた。またこの日にあわせて実行委員会を組織する栗東歴史民俗博物館市民学芸員の会から栗東市を含む滋賀県湖南地域の広い範囲で火伏せの神として信仰される、愛宕さんのお札（お札の発行は元愛宕とよばれる京都府亀岡市千歳町の愛宕神社）が贈られ、2代目のかまど脇に貼った。なお、稼動開始の日には、かまど再生の様子をコマ取りした動画などの上映や、八木透氏（佛教大学歴史学部教授）による講演会「愛宕山と愛宕信仰の諸相」、京都府向日市にある近世の建造物富永屋のかまどを活用する団体、グループとみじんより寺崎正直氏による事例報告などを行った。

伊勢大神楽組名	檀那場					
加藤源太夫組	岡小蔵井上	目下戸山雨丸	川坊東片	袋坂山	川安養寺走井	辺下鉤越谷
森本忠太夫組	上砥山林大橋	金勝中村六地藏	山入手	入原	伊勢落上鉤	小野蜂屋
加藤孫太夫組	野尻小平井十里	出庭縫	今荊	土原	小坂霊仙寺	辻北中小路
山本長太夫組	観音寺					

「獅子舞がやってくる!—伊勢大神楽」平井寿一（『栗東の文化 vol.17』昭和63年12月 栗東町文化体育振興事業団）より作成

*ただし加藤孫太夫組は平成27年時点で解散しており、檀那場は森本忠太夫組などが継承している。

表7 栗東市域を檀那場にする伊勢大神楽



図39 加藤源太夫組の伊勢大神楽による竈祓（2015年 栗東市片山）



図40 再生サポーターによる2代目かまどの除幕



図41 森本忠太夫組による2代目かまどの竈祓

(4) かまど再生サポーターの参加動機と結果～市民に活用される開かれた博物館として～

①参加者の年齢層と参加の動機

冒頭の事業目的でも述べたとおり、かまど再生事業は旧中島家住宅のかまどを再生させることと、その活動を通して市民に活用される開かれた博物館となることを目的にしていた。特に意識したのは、これまで博物館を利用してきた比較的高い年齢層はもちろん、あまり博物館を利用しない子どもから40歳代くらいの世代に開かれた博物館となるよう利用

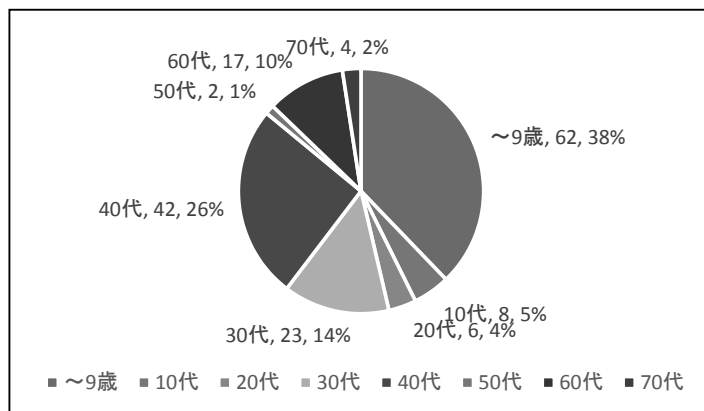


表8 再生サポーターの年齢層

を促すことであった。そのため平成27年度のワークショップのために募集したかまど再生サポーターには小学生以下については保護者同伴での参加を条件とした以外は、特に年齢による制限を設けなかった。また、実行委員会を組織する団体のひとつ、NPO法人 碧いびわ湖では栗東市内の里山で主催する親子遊びの場で、かまど再生事業への参加呼びかけを行った。その結果、再生サポーターとして登録した89人の市民の年齢層は表8のとおり10歳代までが43%、20歳代から40歳代までが44%となり、こちらの意図した年齢層の関心を引くことができたと言えよう。

再生サポーター登録時の参加動機は、「かまどの作り方を知りたい・体験したい」「昔の知恵や工夫を体験したい・学びたい（体験させたい・学ばせたい）」「古民家に興味がある」「子どもの付き添い」に分類すると表9のようになる。36%の参加者がかまどの作り方を知りたい・体験したいという動機で、16%が昔の知恵や工夫を体験したい・学びたい（体験させたい・学ばせたい）という理由で参加している。かまどの作り方、昔の知恵、2つを合わせた52%のなかには小学校での団体来館で旧中島家住宅を訪れ、昔の暮らしを学ぶ体験学習でのかまどの火吹き体験を行ったという子どもたちが多く含まれている。平成26年度に体験学習を受けた子どもたちにはかまどの再生事業についてチラシを配布したため、これを契機に申し込んだ子どもたちも多かった。ただし小学生以下については保護者同伴を条件としたため、「子どもの付き添いで」という動機の保護者も5%みられた。ほかには「楽しそう」という歴史や民俗的な興味にとらわれない、レクリエーションとして参加した再生サポーターも16%あった。

実行委員会では参加者の参加動機を満足させながら、また子どもの付き添いといった受動的な動機で参加した保護者にも満足してもらえる内容となるよう、外部有識者の岸田知之氏（ボランティアコーデ

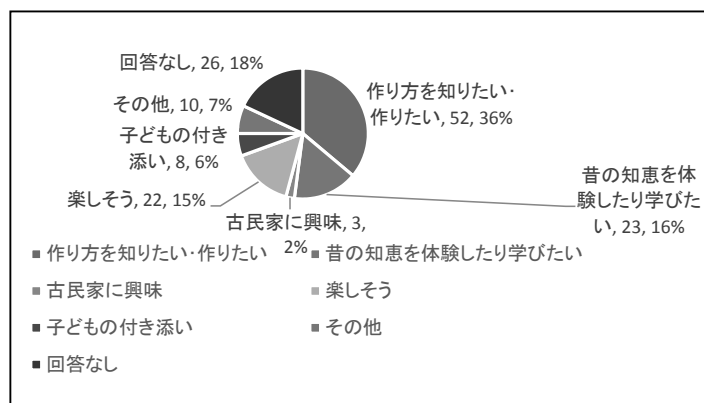


表9 再生サポーターの参加の動機

ィネーター)に再生サポーターと実行委員会との橋渡し役を依頼し、それぞれが満足できるワークショップとなるよう工夫してもらった。ワークショップ終了後、再生サポーターに自由筆記で記入してもらった感想には、「子どもの付き添いとして」という動機で参加した再生サポーターのなかに、“子どもが参加してみたいと言い「えーほんまに一?!」”と言いながら申し込み、参加させていただきました。(中略)だれもが経験できることではないので、参加して本当によかったと思います。「かまどを作る」昔の人はすごいなぁと実感しました。(後略)”“軽い気持ちで参加したが、なかなか経験できない事を経験でき、20年も残る物に携われてよかったです。子供達にも良い経験をさせてもらいました。”などと戸惑いながらも喜んでもらえた内容の回答が複数見られた。“20年も残る物に携われて…”や“(前略) いっしょに参加した子どもが大きくなったら(少しだけど)お手伝いしたんだよ、と話し、栗東の歴史に興味を持ってもらえたらな…”と思います。”など、事業の目的としていた市民に開かれた博物館づくりや、旧中島家住宅や栗東歴史民俗博物館に愛着を持ってもらうことについて、ある程度達成できていたと思われる回答もあった。ほかに、“(前略) …1度きりでなく、それぞれの工程をくり返しできたことで、他の参加者とも交流でき、子どもが毎日、お兄さん・お姉さん・おじさん・おばさんと出会うことを楽しみにできた。”“田んぼの土やワラ(畳)などを混ぜたりの作業を小さなお子達とする作業は、孫のいない私にとって楽しいひとときでした。”という感想にみられるように、かまど作りを中心にした多世代の交流に喜びを感じてくださった参加者もあった。

②再生サポーターからの旧中島家住宅を含む今後の活用アイデア

再生サポーターにはワークショップ終了後に旧中島家住宅を含む2代目のかまどの活用方法について、用紙に自由筆記で記入してもらう方法でアイデアを出していただいた。また同様に自由筆記でワークショップ終了後の感想も記していただいた。

なおこのワークショップ期間中、再生サポーターに向けてかまど活用のアイデア創出のヒントとして博物館の日ごろ行っている調査研究の成果をリーフレット「へっつい通信」(付録DVD 8)に掲載して、毎回のワークショップで提供した。「へっつい通信」は各回・各工程のかまど作りの手順を記す、ワークショップのレジュメとしての機能を持たせながら、併せてかまどに関連する調査研究の成果を掲載した資料とした。このことは博物館の仕事の内容やその成果を可視化するものとし、博物館の仕事や活動の内容など市民にあまり知られていない一面も踏まえてアイデアを出してもらえるように、と意図したものである。

再生サポーターからの活用アイデアを詳しくみてみたい(P26~28 表10)。多く寄せられたのは再生されたかまどを使つての炊飯体験であった。もともと旧中島家住宅のかまどでは市民を対象に月に1回程度炊飯体験を行っていたため、以前と同じように炊飯体験をしたいという要望が多かった。なおこれまで行っていた炊飯体験は、大正から昭和10年代に栗東で生まれ、かまどでの炊飯を経験した方たちの方法に基づいて行うもので、かまどや釜の見た目、音、においなど五感を頼りに炊飯する、というものだ。ほかに月見団子を作るなど季節の

行事と関連させたものや、家電での調理とかまどでの調理で味の比較をするといったもの、ナンを焼くなど斬新なかまどの使い方によるアイデアも出された。

このほか旧中島家住宅という会場の特徴を活かして、昔の室内の明るさ、風呂の入り方、昔の遊びなどを体験するアイデアなども出された。昔体験のアイデアのなかには宿泊を伴って、長時間体験するものもあった。これらは昔の知恵を学ぶ、体験をするというものといえよう。

昔の知恵、体験というもの以外では、炊飯体験を通して、子どもから高齢者までが集う場所として利用するサロンとして使うというものや、縁結びに活用するというものもあった。紙芝居や絵本の読み聞かせの会場として旧中島家住宅を使いたいというものもあった。サロン、縁結び、読み聞かせなどは主催者として博物館以外の組織に委ねる方法なども考えられ、実施できる方法を検討していきたい。

今後の取り組みとして、本事業開催以前から栗東歴史民俗博物館が取り組んできた、旧中島家住宅を活用した炊飯体験を軸としながら、再生サポーターからのアイデアにある各種の昔体験を継続的に開催することで、本事業の成果を継続させていきたいと考える。また、昔体験を博物館が収蔵する豊富な歴史資料、民俗資料に基づいて行うことで本事業が目的としていた、地域のなかで歴史や文化に触れる拠点として、市民に開かれた博物館となることを達成させたい。

また、旧中島家住宅をサロンのように活用するアイデアについては、実行委員会の構成団体でもある NPO 法人碧いびわ湖や農業団体 21 東坂と引き続き連携するほか、これまで関係を持っていない栗東市域での高齢者のサークル、児童館などとも連携する方法などが考えられる。このほか縁結びや読み聞かせなどはそれぞれを得意とする団体、例えば市内ですでに活動している読み聞かせサークルや紙芝居サークル、縁結びならすでに開催実績のある栗東市商工会などと連携する方法が考えられる。博物館の目的とは異なる使用の目的ではあるが、活用する際には旧中島家住宅やかまどの由来なども伝えることで、博物館利用の一步としてもらえるような事業になればと考える。



図42 実行委員会と再生サポーター



図43 再生サポーターによる2代目かまどでの初めての炊飯

表10 かまど再生サポーターの参加動機と提案された今後の活用アイデア

No.	年齢	性別	住所	動機	分類	旧中島家、再生したかまどの活用のアイデア
1	60 歳代	女	守山市	わかしの人の知恵を学ばせてやりたい。手作りが好き。	2	かまどで炊いたごはんは最高においしい。ごはんは仕上がついていく様子や耳で音を聞いてみたり、やきいもをくべてつくったり、くり返し、作業は大変ですが、たくさんの子供達に教えてやってほしいです。主食は米であること。
2	10 歳未満	男	守山市		7	
3	60 歳代	女	栗東市	どういうふうにしたら、かまどが出来上がってくるのか見たかったです。	1	
4	30 歳代	女	栗東市	子どもにとっても貴重な体験だと感じたので。	2	
5	10 歳未満	男	栗東市		7	
6	10 歳未満	女	栗東市		7	
7	60 歳代	男	栗東市	子供の頃、実家にあったかまどを懐かしく思い出して、興味を持った。	3	
8	30 歳代	女	栗東市	かまどづくりに興味があるため。子どもと一緒に体験できるのが楽しみ。	1	
9	10 歳未満	女	栗東市		7	
10	10 歳未満	男	栗東市		7	
11	30 歳代	男	京田辺市	かまどに触れる機会はなかなかないと思うので、子どもにもそんな体験をさせたいと思います。	2	一般の人がかまどを使った食事に利用し易くなる為に、簡単なかまどの利用方法の説明をセットにした設備の予約をインターネット上から出来るようにすると、広く利用されるのではないかと思います。
12	30 歳代	女	京田辺市		7	
13	10 歳未満	男	京田辺市		7	
14	30 歳代	女	栗東市	子どもと一緒にかまどでごはん体験に参加し、楽しめたので。かまど作りに興味がある。	1	旧中島家で 1 泊体験。オーガニックマルシェ。かまどごはん付いろいろワークショップやお話会。音楽会 etc.
15	10 歳未満	男	栗東市	かまどでごはん体験に参加し、とても楽しめたので。	4	
16	60 歳代	女	栗東市	10 月のシンポジウムに参加したので。	6	
17	40 歳代	男	東近江市	かまどをどのように作るのか知れたかった。	1	ごはんをただでなく、昔のストープや、お風呂たきなど。昔の生活がどんなだったか、より深く知ることができたらうれしい。昔の遊び (めんこやこま回し) をすること。
18	40 歳代	女	東近江市	以前、かまどめしに参加した時に、かまど再生事業について知り、かまどができる過程を知るチャンス!!と思ったから。	1	かまどだけでなく、昔の部屋の明かり (暗さ)、風呂、調理道具、寝具 etc 生活をより深く理解できる場所にする。
19	10 歳未満	女	東近江市	どうやって作るか、不思議に思ったから。	1	お泊り会。
20	10 歳未満	男	東近江市	泥団子が作れたかったから。泥団子を作るのが好きだから。	1	ひとりでごはんを作りたい (全部やる)。
21	40 歳代	女	栗東市	子どもが参加すると言ったので、付き添いで…。	5	
22	10 歳未満	女	栗東市	作ってみたかった。	1	月一くらいで、イベントをひらいてみたいから楽しいと思う。
23	10 歳未満	女	栗東市	楽しそうだから	4	とまってみてください。
24	40 歳代	男	京田辺市	楽しそうだから	4	かまどで作った料理と家電で作った料理の食べ比べ。
25	10 歳未満	男	京田辺市	楽しそうだから	4	ごはんをたいたり、おつゆをつくってたべたい。ふ〜とするとやつをしたい。
26	10 歳未満	男	栗東市	全工程を把握したいので。	1	火起し体験や昔遊び体験をほくはしたいです。
27	40 歳代	女	栗東市	子供同伴のため。	5	火起し体験や、薪割り体験、旧中島家を通して、昔の家の工夫や人の知恵が伝わる、知識が学べたりできると良いと思います。ゆっくり流れる時間の中で、家の神様、火の神様、子供は信じてないけれど、感じられる空間であって欲しい。
28	40 歳代	男	栗東市	妻が参加不可能な場合の同伴。	1	
29	40 歳代	男	栗東市	かまどを再生するお手伝いをする事で、昔の人の暮らしを少しでも知っておきたい。	1	夏休み限定、宿題寺子屋。小・中・高入り混じって。夏休み限定。ごろごろとヘルネ。又は宿泊体験。秋限定、名月をめぐる会。かまどを利用して月見ダンゴをつくる!!
30	10 歳代	男	栗東市	かまどがどのような感じになるのかを知りたい。	7	
31	40 歳代	女	栗東市	学校でもらった手紙を見て、やってみたいと思ったからです。	2	
32	10 歳未満	女	栗東市	学校でもらった手紙を見て、やってみたいと思ったからです。	1	
33	40 歳代	女	栗東市	「かまどめしを炊こう」に参加し始めてから 4 年、毎回スタッフの皆様のおかげで楽しくかまどでの炊飯体験をさせていただいてきました。これまでお世話になってきたかまどの最後を見届け、新しいかまどの再生に立ち会える貴重な機会なので是非家族で参加させて頂きたいです。	1	今まで通りでいいかな。
34	30 歳代	女	栗東市		1	

35	10歳未満	女	栗東市			7
36	10歳未満	男	栗東市			7
37	10歳未満	男	栗東市			7
38	30歳代	女	栗東市	電気やガスが使えない場合を考えることができる。時間のかかることも体験したい。		2
39	10歳未満	女	栗東市			7
40	10歳未満	男	栗東市			7
41	30歳代	女	栗東市			7
42	10歳未満	女	栗東市			7
43	20歳代	男	草津市	お米が大好きで、昔のお米の炊き方や、かまどの仕組みなどを学びたい。	2	今の若い子は、料理に興味を持っている人が少なくなっている。特に、惣菜やレトルトでまかなっているため、健康に良くない。一つの理由に、食育や料理の技術、特に料理の楽しさを知らない人が多い。そこで、参加費（材料費）なども集めて、かまどを使って、ごはん、みそ汁、煮ものなど、料理の楽しさを子供たちに伝えながら、昔の人の調理場を体験しつつ、食育も学ぶ。
44	10歳未満	男	栗東市	おもしろそうだから。	4	旧中島家住宅で、まきわり体験をしたり、かまどでピザを焼く。
45	30歳代	男	栗東市	おもしろそうだから。	4	旧中島家住宅での一泊体験（テレビや携帯電話もなく、ごはんもかまどを利用していたの昔の生活体験）。かまどめしを使得の料理教室
46	30歳代	女	栗東市		7	
47	40歳代	男	守山市	子どもがかまど作りに非常に興味を持ったため。	1	
48	30歳代	女	守山市	かまど作りを子どもと一緒に楽しみたい。	4	
49	10歳未満	男	守山市	かまどを作ってみたいと強く思っています。好きなテレビ番組は、ビフォー・アフターです。	1	
50	10歳代	女	守山市	体験したいと思った。	1	
51	40歳代	女	守山市	体験したいと思った。	1	子供限定で宿泊体験。昔ながらの生活を体験する。
52	10歳未満	女	守山市	体験したいと思った。	1	
53	40歳代	女	栗東市	なかなか出来ない体験で、やってみたかったから。ものづくりが好きだったので。	2	
54	10歳代	女	栗東市	かまどをつくってみたいから、興味があったから。	1	
55	10歳未満	男	栗東市	かまどづくりが楽しそうだと思ったから。	4	
56	10歳未満	女	栗東市	かまどがどんな風に作られているのか知りたいし、その工程も楽しそうだから。	1	あんまり人気がないため、ボスターだけではなく、図書館から出てきた人にカラーツきのボスターをわたしたりして人気が出る中島家住宅にすれば良いと思う。
57	40歳代	女	栗東市	娘が“参加したい”と言ったので。	5	これまで通り、かまど飯体験を続行してほしい。その際、きちんと出汁をとることも学んでみそ汁をいただけたらな〜、と思う。
58	50歳代	女	栗東市	おもしろそうだから。	4	
59	40歳代	男	京都市	アフリカで日本式のかまどの普及に努めた岸田繁盛さんと時を同じくしてケニアで国際協力を行っていたことと、農的生活の中のかまどの可能性について興味がある中でこのような機会にめぐりあえたこと。	6	諸外国の方に、日本の伝統的な生活様式をかまどや中島家住宅を通じて知っていただきたいです。Airbnbなどで年に数回でも開放していただければ、日本の歴史、文化などの情報発信できていると思います。
60	30歳代	女	京都市	祖母の時代の衣食住を学び、現代の暮らしに生かしたいため。	2	掃除の仕方をならう…っつていかがでしょうか？例えば、お米のとき汁で柱を拭く、梅の実でサンをこする（ひき戸のすべりをよくする）、障子とふすまのはりかえ…。お手製のほうきを作ってみない。それでおそうじはいかがでしょうか。
61	10歳未満	男	守山市	炊き上がって、フタを取るときは、顔を近づけ覗きこんでしまいました。甘くておいしい♪「おかわりしようっ」と茶碗を持った手がつい出ちゃいました。	1	新しく生まれ変わった『かまど』で、美味しい新米を食べたいです。ごはん食のおいしさを教えてください。
62	40歳代	男	守山市	2014年夏、“かまどめしを炊こう!”に参加させていただきました。まき割り、火吹き体験など、子供の体験の場として、非常に良かった（親も）。そんなありがたい『かまど』が解体され、新しく再生することにチャレンジできるとあって、親子で参加させていただきました。	1	“かまど”で縁結び…独身男女の皆さんに、現代では珍しくなった“かまど”を使って、自分たちでご飯を炊く体験等を通して、交流を深めていただく。旧中島家住宅の“空間”を活かす…星空観測、焼き芋、かまど塾などを開催する。伝統行事と連携して、滋賀・栗東の文化を発信する。
63	60歳代	男	栗東市	ヘッツイさん再生の体験に興味があった為。	2	栗東の名産品や手作り品等の販売でもっと広くPRしてはどうか。
64	10歳代	男	大津市		7	
65	70歳代	男	栗東市	自宅でも作った経験がある。	1	かまどを中心に、当時の生活の体験（食事等を含む）を再現したいですね。
66	60歳代	男	栗東市		7	

67	70 歳代	女	栗東市	栗東に越して来て日が浅く、広報で「かまどめしを炊こう」というのに興味が有り、どのようなものか見てみたかった。	7	小さな子供が一生懸命かまどの解体の土を運んでいるのを見て、すごくよかったです。子供たちの集まる場所、又は大人がおいしい（田舎料理）を作る時に、活躍出来たら良いと思います。広く一般のサークルなどで利用して、おしゃべりの場所など。
68	30 歳代	男	大津市		2	
69	30 歳代	女	大津市	子どもが以前、学校の校外学習で、かまど体験をさせて頂き、楽しそうにその内容を話してくれました。かまどを一から作るなかなか体験できない事だと思い、参加させて頂きたいと思いました。	2	
70	10 歳未満	女	大津市	前、学校の校外学習で旧中島家で火吹き体験、ランブの体験などをさせて頂いていただき、興味をもったので、参加したいと思いました。	2	小学3年のときにかまどの火吹き体験をさせてもらったので、小学3年の「昔のくらし」の学習のときに旧中島家などを見学する等。
71	10 歳未満	男	大津市		7	
72	10 歳未満	女	大津市		7	
73	60 歳代	男	栗東市	栗東市広報 (Facebook) の案内をみて。	6	
74	60 歳代	女	栗東市	以前、そばとかまどご飯のイベントに参加しまして興味があまりだったので、主人と相談し、少しでもお力になればと二人一緒に参加させて頂いていただくことにしました。	6	栗東の郷土料理を作るなど。昔の遊び（お手玉作り、竹とんぼ作りなど）
75	20 歳代	女	栗東市		7	ごはんだけではなく、ナンを焼くとかはできないでしょうか？かまどの中で、炭焼でオカリナのような楽器の楽器を作ったりできないでしょうか？（古代の生活道具 etc）染め物をしたりお湯を沸かす事を利用してできる事など…。
76	40 歳代	女	栗東市	昔のくらしへの興味や歴史の共感というよりも（ないわけではないですが）、市の施設再生に自分も関わったという、記念になるかなと思いい、参加を希望しました。	1	
77	40 歳代	男	栗東市	自分が小さいころに、ご飯やお湯はおくどさんで炊いていたような…。懐かしさと、どういう作り方をするのだろうと思いい、事業に参加したいと思いいました。	1	栗東の昔話、怪談お話し
78	10 歳代	男	栗東市		7	
79	60 歳代	男	長浜市	自分でかまどを作りたい。（自宅に作る予定）	1	
80	10 歳未満	男	守山市	かまど炊き体験が楽しかったから。	4	花畑にしたら、人が来ていいと思う。
81	10 歳未満	女	守山市	かまど炊き体験が楽しかったから。	4	畑をつかって野菜作りをしたい。
82	40 歳代	女	守山市	子ども達と貴重な体験をしてみたかったから。	2	今後もたくさんの子どもの達に知ってもらいたい、かまど炊きの体験も味わってみたいと思います。
83	40 歳代	男	守山市	仕事が休みの時は家族と一緒に過ごしたいから。	6	栗東市以外の子どもたちにも広まっていきたいなと思います。
84	40 歳代	女	大津市	栗東のたまてばやしで、かまどづくりをされているのを見て、かまど作りに興味を持ったからです。	1	宿泊 何回かに1回、かまどづくりに参加した人達の同窓会?を兼ねたご飯炊きイベント。子どもからお年寄りの方まで、幅広く集まるサロンのもの（かまどご飯つき）。昔遊びをお年寄りの方から伝授してもらおうイベント（かまどご飯つき）。（量があるというのがサロンにも、遊びにも良いと思います。）
85	10 歳未満	女	大津市		7	
86	10 歳未満	男	大津市		7	
87	20 歳代	男	栗東市		7	
88	60 歳代	男	栗東市	古民家に興味があつたから。	3	ゲストハウス
89	40 歳代	男	草津市		7	

参加動機の種類

- 1 …作り方を知りたい・作りたい
 - 2 …昔の知恵を体験したい・学びたい
 - 3 …古民家に興味
 - 4 …楽しそう
 - 5 …子どもの付き添い
 - 6 …その他
 - 7 …回答なし
- ☐ で再生サポーターの申し込み単位（保護者とお子さまなど）を示している。

4. 事業のまとめ～成果と展望～

市民とともに旧中島家住宅かまど再生事業について、最後に簡単ではあるがまとめておきたい。旧中島家住宅のかまど再生事業は老朽化したかまどを再生すること、この体験をととして栗東歴史民俗博物館が目指す、市民に開かれた博物館づくりに寄与することを目的としていた。

かまどは無事に再生することができ、懸案になっていたかまどの高さについても、高くしたことで使い勝手が向上した。また、お披露目直後から週末を中心に多くの市民に活用していただくことができている。ほかに近隣の小学校等の団体利用も多く、お披露目から平成28年（2016）2月までに33校、約2,500人の児童に再生されたかまどで火吹きを体験してもらうことができている。

また、前章で述べたようにこの事業でのワークショップではこれまで博物館をあまり利用されていなかった年齢層の市民の参加が得られ、博物館という施設に足を向けてもらうきっかけとなったと考えている。

このように事業を遂行できたのは、ワークショップに参加された再生サポーターのみなさんはもとより、宮奥淳司氏をはじめとする外部有識者のみなさんから多大なるご協力を得たことによるもので、ただただ感謝申し上げるばかりである。

またいずれ20年から30年ほど経過すると、旧中島家住宅の2代目のかまどは再び築き直しの時期が来るだろう。“旧中島家住宅のかまどは常若のかまど”とは外部有識者として関わってくださった佐々木進氏の実行委員会での言葉だ。式年遷宮の行われる伊勢神宮のように、常に生まれ変わり、古くて新しいかまどだそうだ。いずれ再生の時期を迎えたとき、今回のように多くの人が旧中島家住宅のかまどに関わり、生まれ変わることを切に願って、今回の事業を締めくくりたい。



図44 旧中島家住宅初代かまど



図45 旧中島家住宅2代目かまど

凡例

- 1.本報告書は、市民とともに行う栗東歴史民俗博物館創造活動事業実行委員会が実施した『栗東歴史民俗博物館旧中島家住宅かまど再生事業』の事業とそれに関連する資料・記録をまとめた報告書である。
- 2.本報告書の執筆は、「第2章・(1) 旧中島家住宅の特性」については吉見静子氏（岐阜女子大学名誉教授）が、それ以外は大西稔子（栗東歴史民俗博物館学芸員）が執筆した。
- 3.本報告書に添付した写真、図・表はP46～47に一覧で示した。写真のうち特に記さないものについては、市民とともに行う栗東歴史民俗博物館創造活動事業実行委員会が撮影した。また、図の作成者については一覧に記したとおりである。
- 4.本報告書に関連した写真、図、表、調査データについては栗東歴史民俗博物館が管理する。

協力者

（団体）

愛荘町歴史文化博物館 雨丸愛宕講 伊勢大神楽森本忠太夫組 大津市埋蔵文化財調査センター 大津市歴史博物館
近江八幡市教育委員会 大手前大学史学研究所 上砥山西出愛宕講 観音寺愛宕講 草津宿本陣 蔵町愛宕講
高知県立美術館 金剛苑 さいたま市 滋賀県教育委員会 富永屋の会・グループとみじん 辻越（シモ）愛宕講
辻越（御園）愛宕講 出庭愛宕講 出庭北出愛宕講 パナソニック株式会社 びわ湖放送株式会社
東近江市近江商人博物館 東坂愛宕講 東坂愛宕講 東坂自治会 目川自治会 野洲市歴史民俗博物館 山入愛宕講
よろずでざいん 美之郷愛宕講 立命館大学情報理工学部

（順不同 敬称略）

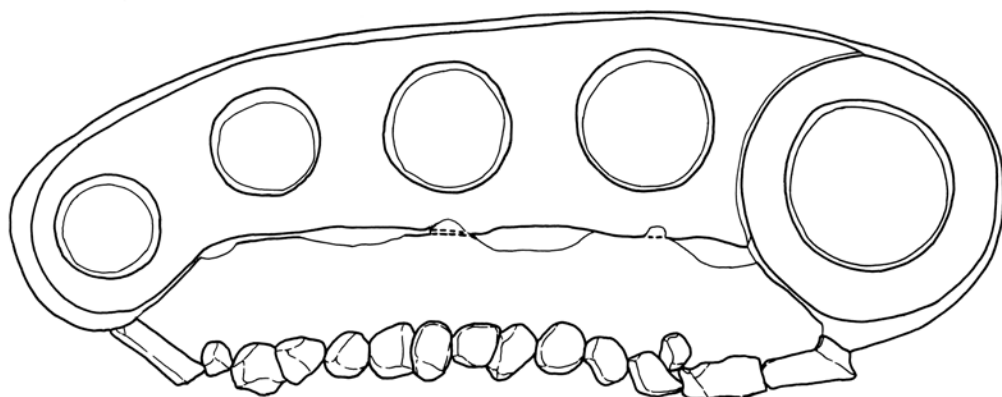
（個人）

青木由江 安藤あき子 伊藤弘 井上克治 今井昭一 岩崎義雄 太田正雄 奥村和広 笠井保男 鎌田容子 川崎和男
川崎喜代子 北村文男 小林茂男 佐治幾太郎 佐野清吾 佐野まゆみ 嶋林典子 嶋林幸英 園田陽子 園田康郎
鈴木茂男 菅原千華 竹島富子 竹村和夫 竹村民之 立木潤一 田中広 玉城玲子 出水伯明 寺崎正直 富田光子
中井牧造 中川未子 長束時男 中野善夫 服部仁 福田俊一郎 前田清澄 八木透 三浦捨次 三浦平次 山本晴子

（順不同 敬称略）

そのほか、市民とともに行う栗東歴史民俗博物館創造活動事業実行委員会を構成する団体のメンバーのみなさんにはワークショップ運営やその他の面で多大なるご協力を賜りました。謝して記します。

旧中島家住宅 初代土製かまど実測図



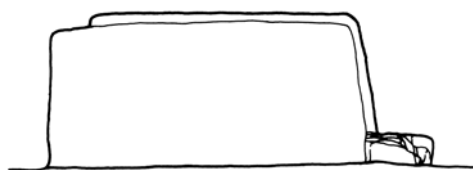
旧中島家住宅 初代土製かまど（平面図）



旧中島家住宅 初代土製かまど（立面図／正面）



旧中島家住宅 初代土製かまど（立面図／背面）



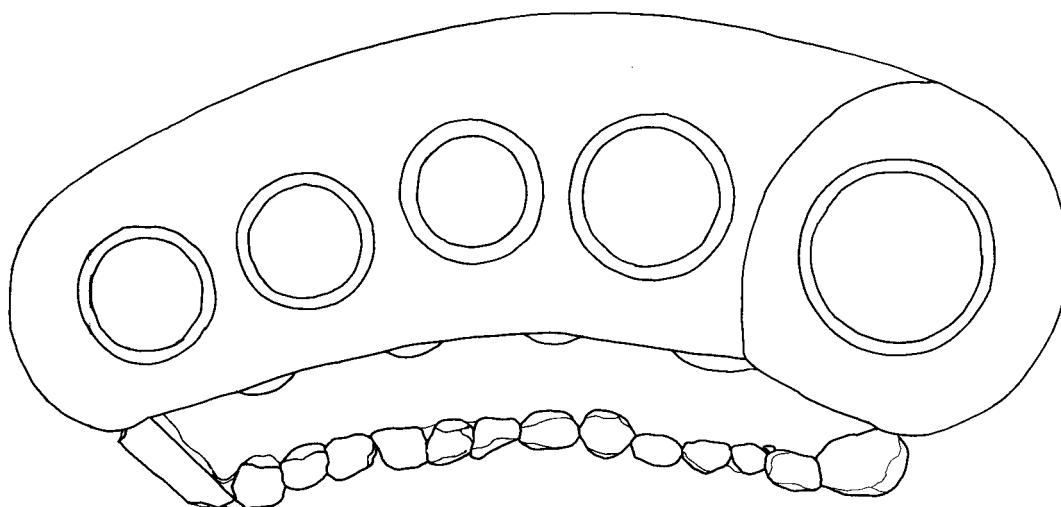
旧中島家住宅 初代土製かまど（立面図／左側面）



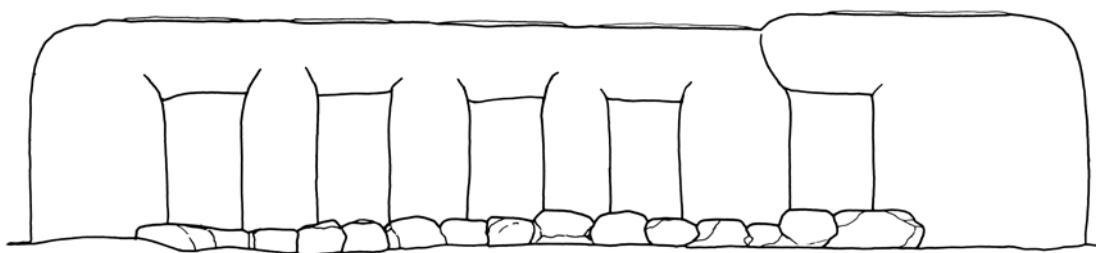
旧中島家住宅 初代土製かまど（立面図／右側面）

0 0.5 1m

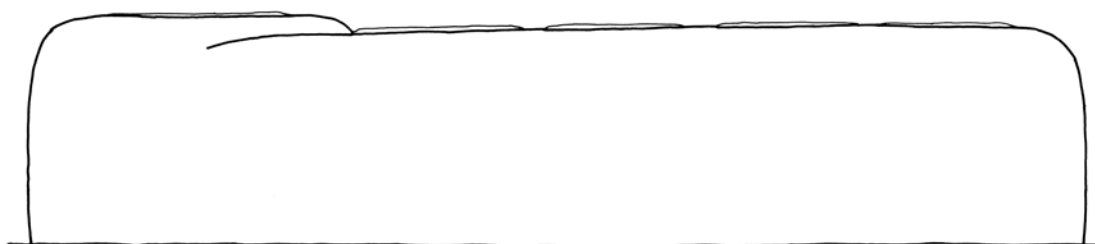
旧中島家住宅 2代目土製かまど実測図



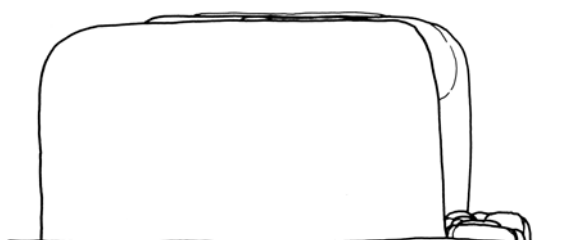
旧中島家住宅 2代目土製かまど（平面図）



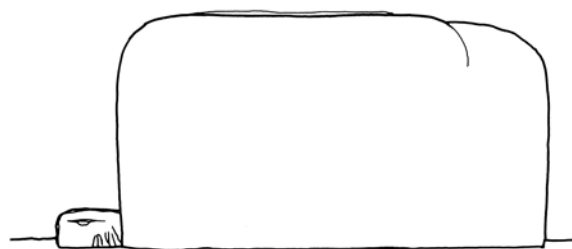
旧中島家住宅 2代目土製かまど（立面図／正面）



旧中島家住宅 2代目土製かまど（立面図／背面）



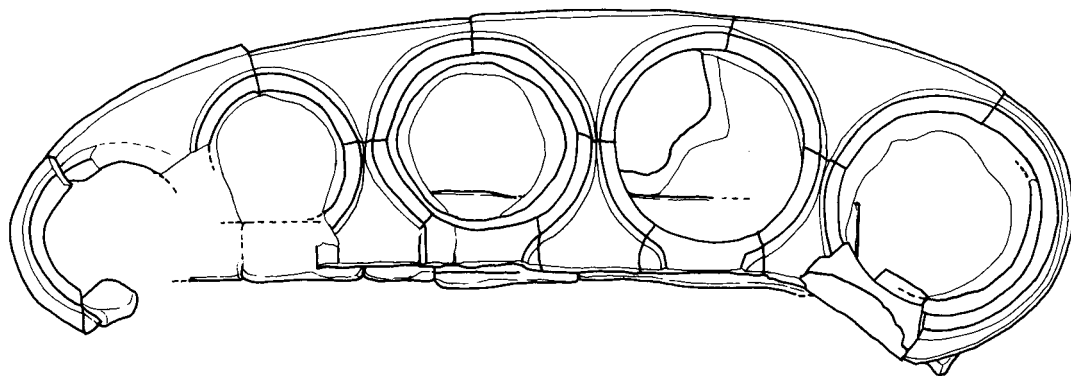
旧中島家住宅 2代目土製かまど（立面図／左側面）



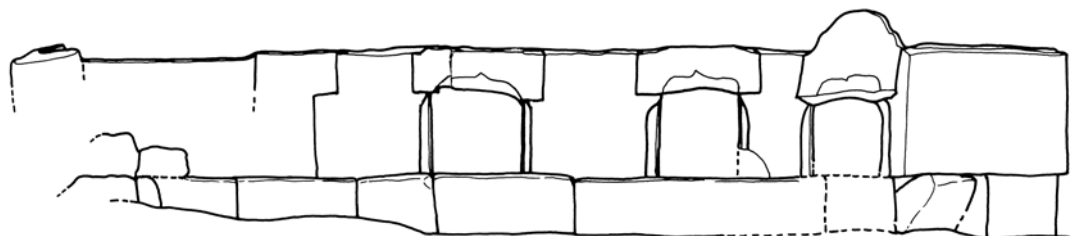
旧中島家住宅 2代目土製かまど（立面図／右側面）

0 0.5 1m

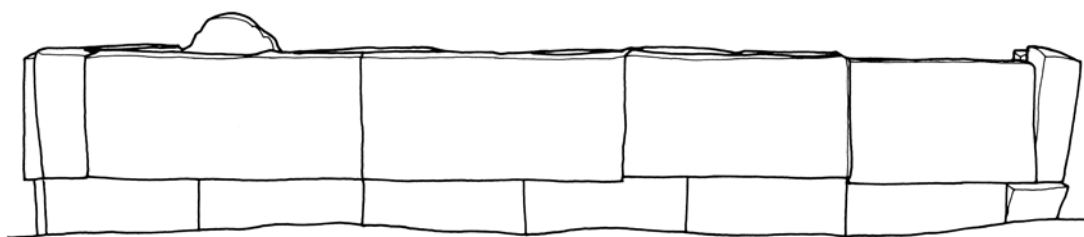
栗東市東坂 T・T家住宅 瓦製かまど実測図



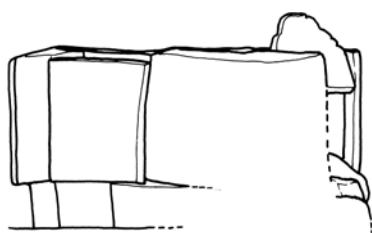
T・T家住宅 瓦製かまど (平面図)



T・T家住宅 瓦製かまど (立面図／正面)



T・T家住宅 瓦製かまど (立面図／背面)



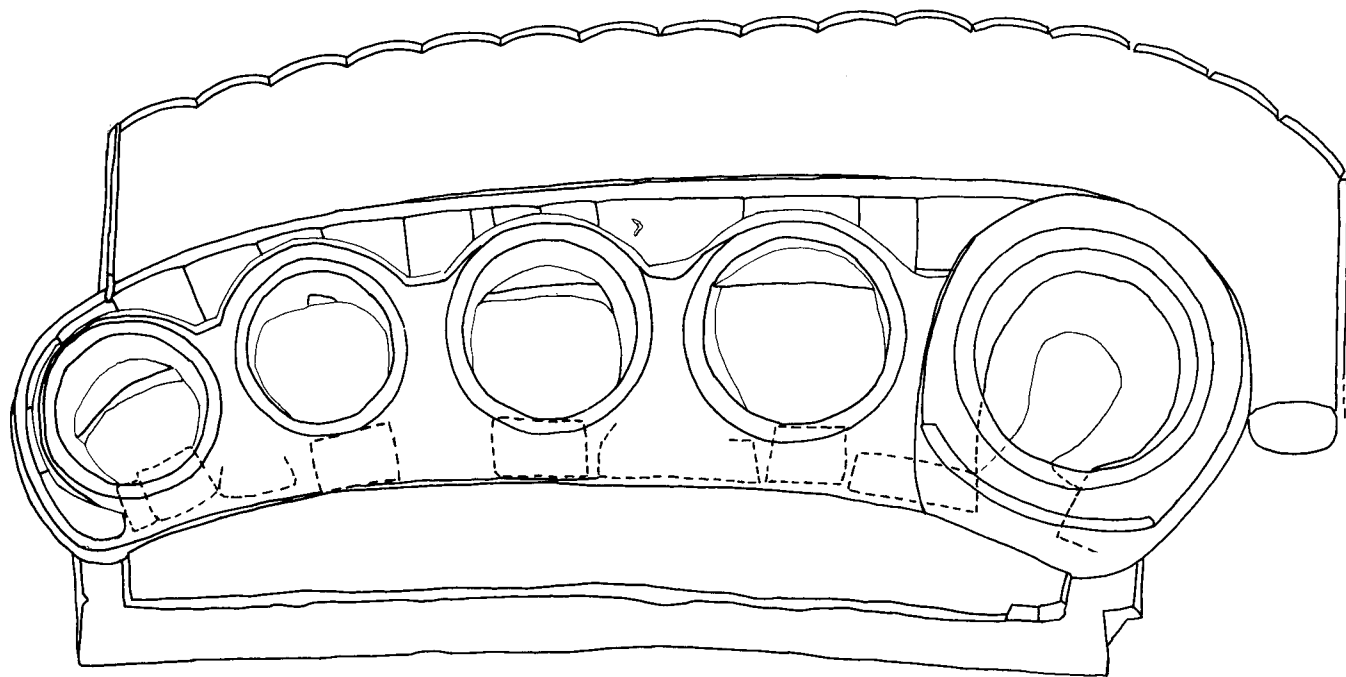
T・T家住宅 瓦製かまど (立面図／左側面)



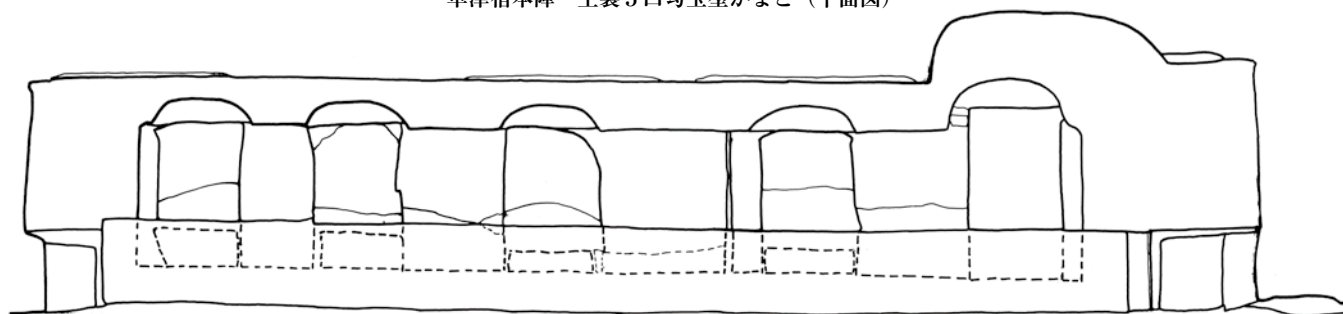
T・T家住宅 瓦製かまど (立面図／右側面)

0 0.5 1m

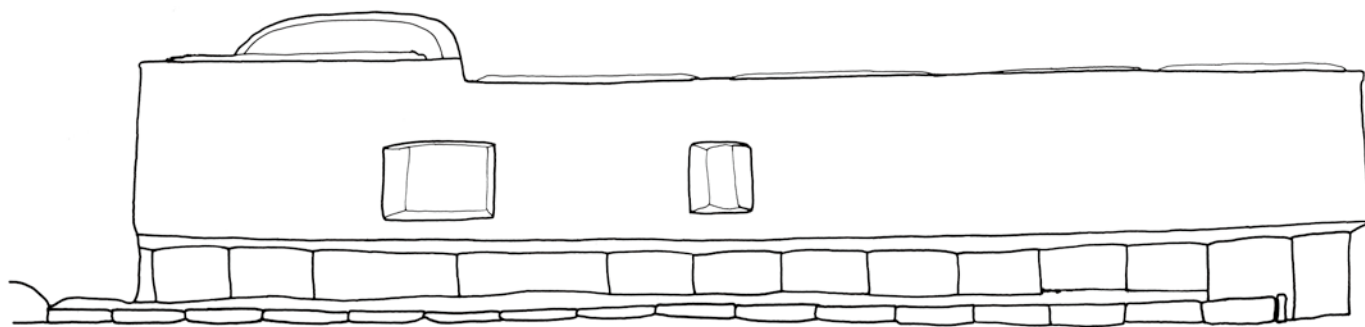
草津宿本陣 土製5口勾玉型かまど実測図



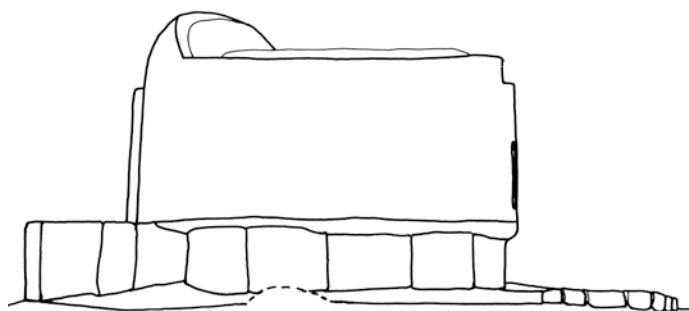
草津宿本陣 土製5口勾玉型かまど（平面図）



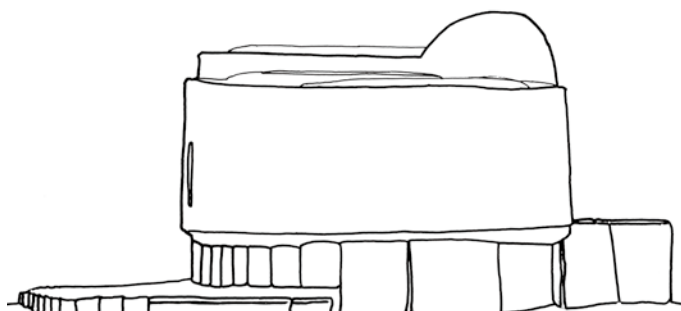
草津宿本陣 土製5口勾玉型かまど（立面図／正面）



草津宿本陣 土製5口勾玉型かまど（立面図／背面）



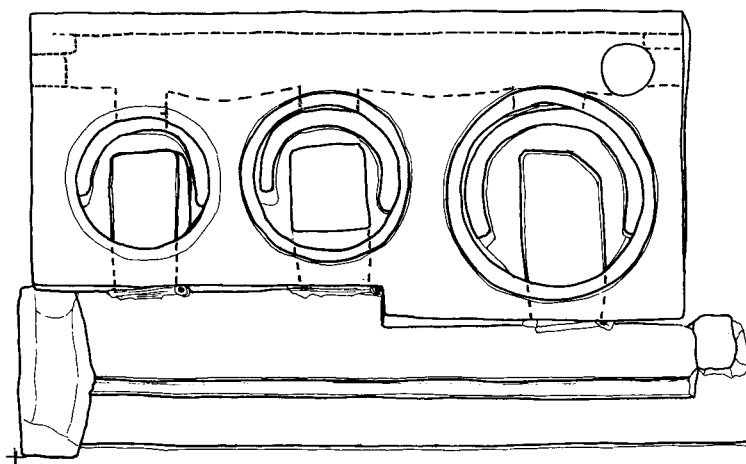
草津宿本陣 土製5口勾玉型かまど（立面図／左側面）



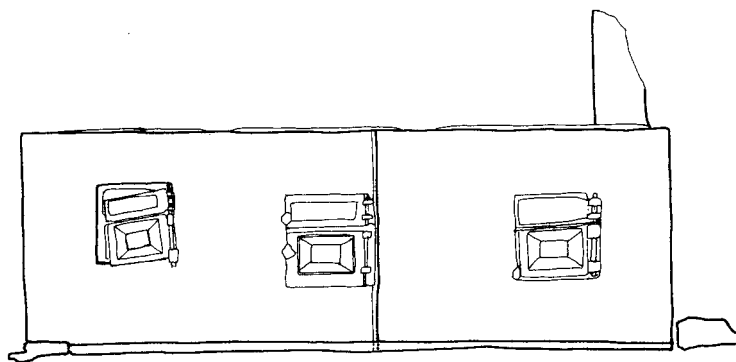
草津宿本陣 土製5口勾玉型かまど（立面図／右側面）

0 0.5 1m

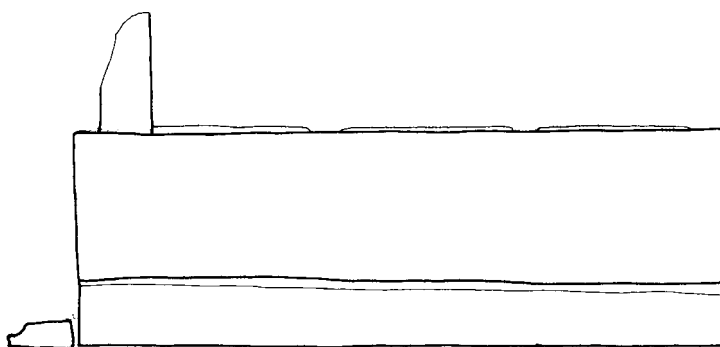
栗東市井上 I・K家住宅 土製改良かまど実測図



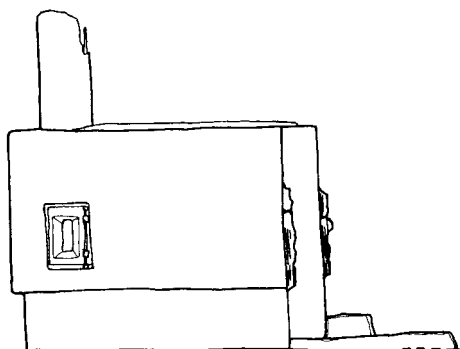
I・K家住宅 土製改良かまど（平面図）



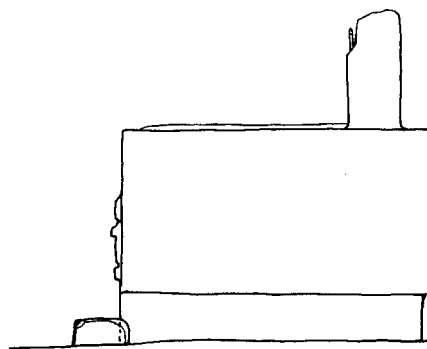
I・K家住宅 土製改良かまど（立面図／正面）



I・K家住宅 土製改良かまど（立面図／背面）



I・K家住宅 土製改良かまど（立面図／左側面）



I・K家住宅 土製改良かまど（立面図／右側面）

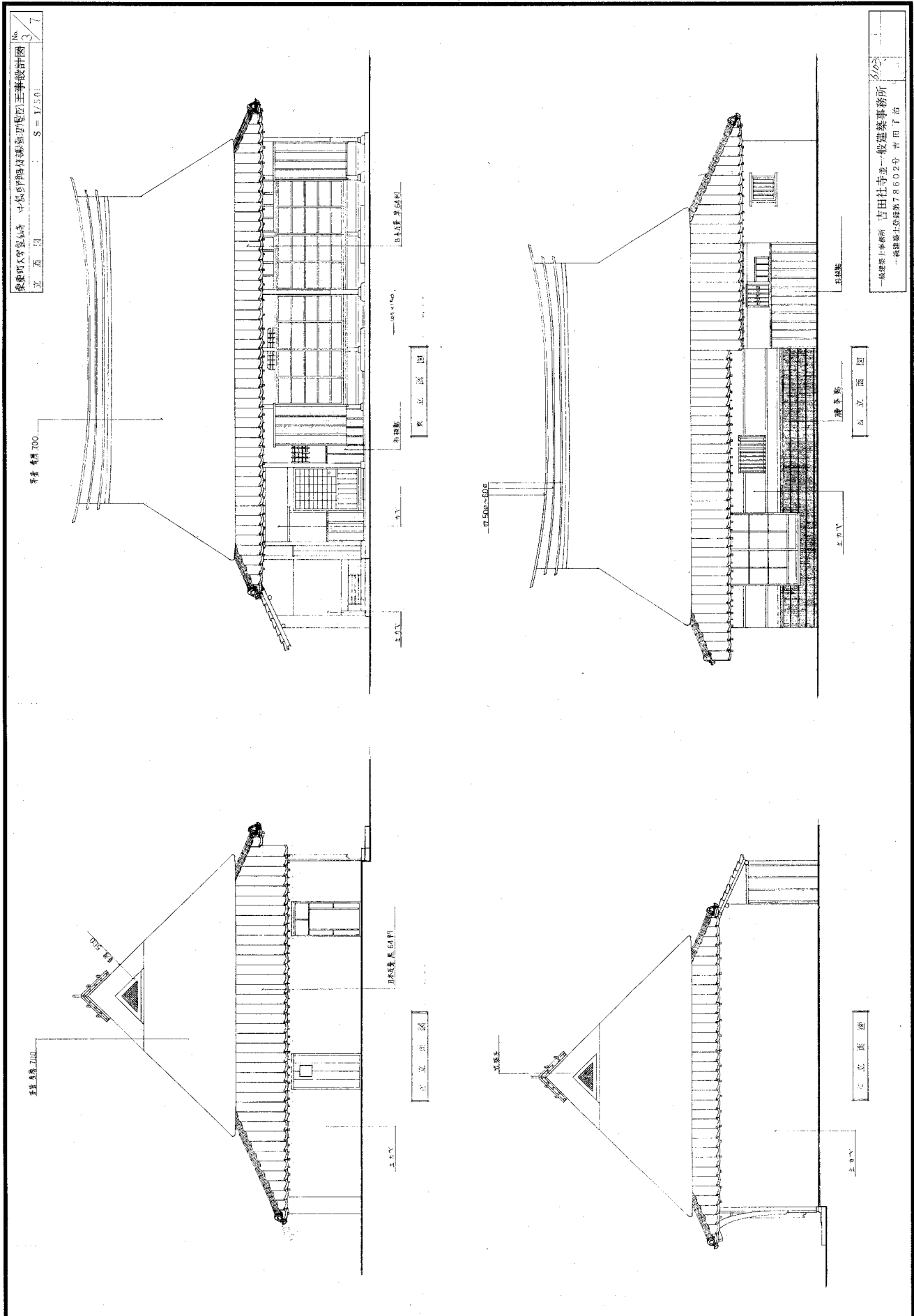
0 0.5 1m

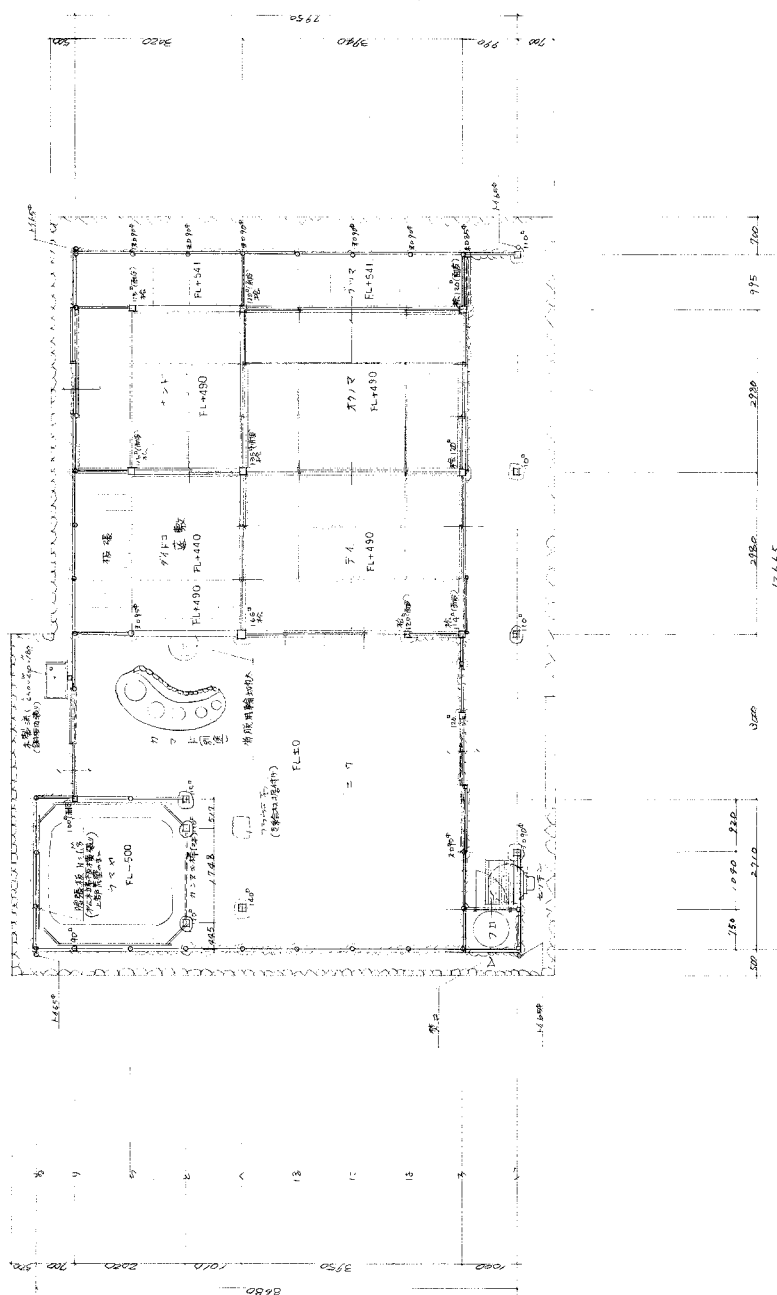
名 称 T・T 家住宅瓦製かまど														
来 歴 昭和 40 年ごろ、T 家の知人宅にあったものを譲り受けたかまど。知人宅の所在場所やそれまでのかまどの来歴は不明。外面は土製ではなく瓦製で、12 個程度のパーツを組立てて作られる。かまどの内側、火袋側は土を塗り固めて作られている。形状は勾玉型で口数は 5 口ある。旧中島家住宅や草津宿本陣の土製勾玉型かまどとよく似た形状だが、大釜用の掛け口が他の掛け口と同じ高さであることが特徴となっている。現在は使われておらず、内部の土が一部崩落したり、外面の瓦が一部欠損している部分がある。														
	<table> <tr><td>所 在 地</td><td>栗東市東坂</td></tr> <tr><td>築 造 年 代</td><td>不明</td></tr> <tr><td>口 数</td><td>5 口</td></tr> <tr><td>法量（最大高）</td><td>58.0cm</td></tr> <tr><td>法量（最大長）</td><td>279.0cm</td></tr> <tr><td>法量（最大幅）</td><td>82.0cm</td></tr> <tr><td>話 者 情 報</td><td>昭和 36 年生／男性 昭和 27 年／男性</td></tr> </table>	所 在 地	栗東市東坂	築 造 年 代	不明	口 数	5 口	法量（最大高）	58.0cm	法量（最大長）	279.0cm	法量（最大幅）	82.0cm	話 者 情 報
所 在 地	栗東市東坂													
築 造 年 代	不明													
口 数	5 口													
法量（最大高）	58.0cm													
法量（最大長）	279.0cm													
法量（最大幅）	82.0cm													
話 者 情 報	昭和 36 年生／男性 昭和 27 年／男性													
かまどに関する信仰 特になし														
当該かまど以前のかまど 瓦製のかまど以前は、土製のかまどが土間に設置されていた。														
備 考 特になし														

名 称 草津宿本陣 土製5口勾玉型かまど														
来 歴 草津宿本陣にある土製かまど。勾玉型で口数は 5 口ある。築造年代は不明だが、平成元年に修理を受けている。弘化 3 年（1846）の屋敷絵図には現状の土製かまどとほぼ同じ位置に、5 口のかまどが描かれていて、現存する土製かまどがこの屋敷絵図まで遡る可能性もある。														
	<table> <tr><td>所 在 地</td><td>草津市草津</td></tr> <tr><td>築 造 年 代</td><td>不明</td></tr> <tr><td>口 数</td><td>5 口</td></tr> <tr><td>法量（最大高）</td><td>79.0cm</td></tr> <tr><td>法量（最大長）</td><td>324.0cm</td></tr> <tr><td>法量（最大幅）</td><td>96.0cm</td></tr> <tr><td>話 者 情 報</td><td>-</td></tr> </table>	所 在 地	草津市草津	築 造 年 代	不明	口 数	5 口	法量（最大高）	79.0cm	法量（最大長）	324.0cm	法量（最大幅）	96.0cm	話 者 情 報
所 在 地	草津市草津													
築 造 年 代	不明													
口 数	5 口													
法量（最大高）	79.0cm													
法量（最大長）	324.0cm													
法量（最大幅）	96.0cm													
話 者 情 報	-													
かまどに関する信仰 特になし														
当該かまど以前のかまど 来歴のとおり														
備 考 特になし														

名 称 I・K 家 土製改良かまど														
来 歴 直線型 3 口のかまど。現在はセメントで外面が覆われているが、もとは土製 4 口のかまどであった。昭和 30 年代後半に土製かまどを改修し、土製のかまどをセメントで覆って改修したもの。改修の際、1 口減らして 3 口にし、各火袋を煙道でつないで煙突を設けた。また焚口には鋳物の扉をつけた。土製かまどであった頃、大釜は他の口にくらべて一段高くなっていたが、セメントで覆う際、同じ高さに変更された。 セメントで覆う以前のかまどについて、築造年代は不明だが、昭和 24 年生まれの話者が生まれた頃にはあったという。直線型ではなく、やや湾曲した勾玉型になっていて、全体は黒い漆喰で塗られていた。 火袋内部は土でできた部分が確認できるが、火袋上部に煙道への排気口が設けられたいしているため、オリジナルの土製かまどの火袋そのままという可能性は低い。なお、現在はこのかまどは使用していない。														
	<table> <tr><td>所 在 地</td><td>栗東市井上</td></tr> <tr><td>築 造 年 代</td><td>不明</td></tr> <tr><td>口 数</td><td>3 口</td></tr> <tr><td>法量（最大高）</td><td>59.0cm</td></tr> <tr><td>法量（最大長）</td><td>174.0cm</td></tr> <tr><td>法量（最大幅）</td><td>81.5cm</td></tr> <tr><td>話 者 情 報</td><td>昭和 24 年／男性</td></tr> </table>	所 在 地	栗東市井上	築 造 年 代	不明	口 数	3 口	法量（最大高）	59.0cm	法量（最大長）	174.0cm	法量（最大幅）	81.5cm	話 者 情 報
所 在 地	栗東市井上													
築 造 年 代	不明													
口 数	3 口													
法量（最大高）	59.0cm													
法量（最大長）	174.0cm													
法量（最大幅）	81.5cm													
話 者 情 報	昭和 24 年／男性													
かまどに関する信仰 大釜の上に、伊勢大神楽の札が置かれている。														
当該かまど以前のかまど 不明														
備 考 特になし														

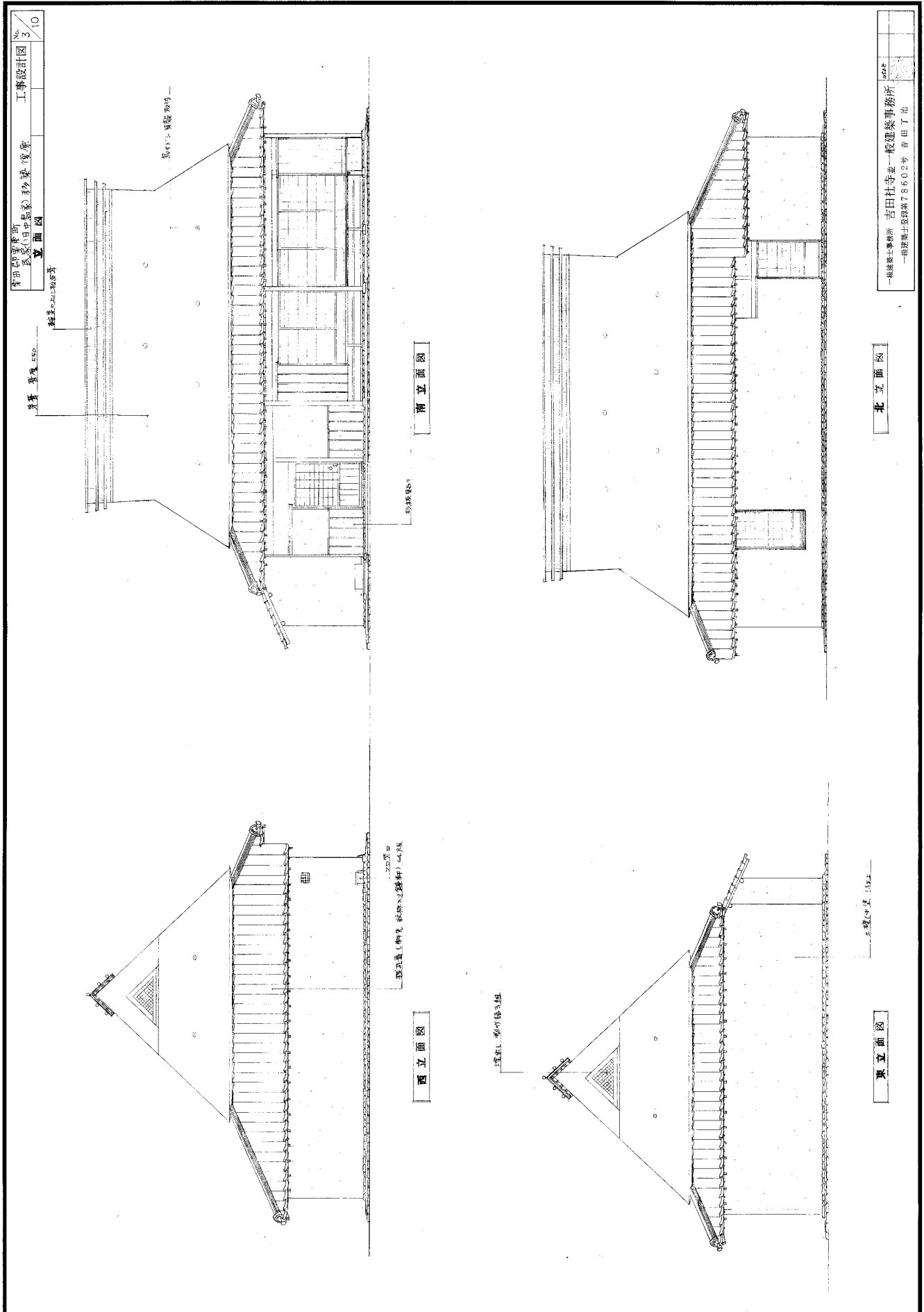




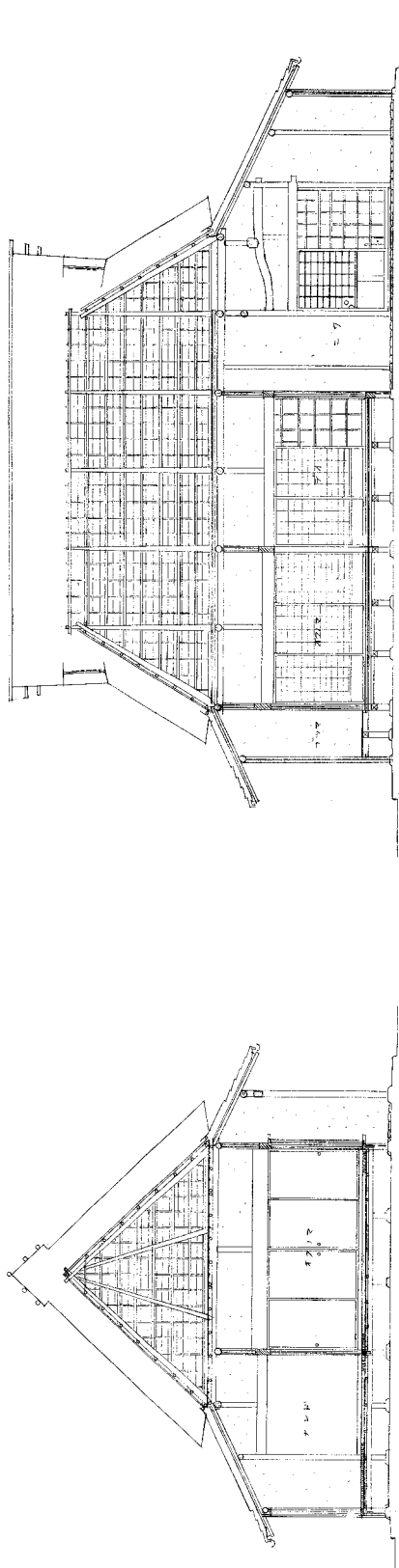


天 國 之 門

案士事務所 吉田杜寺並一般建築事務所
一級建築士登録第78602号 吉田了治

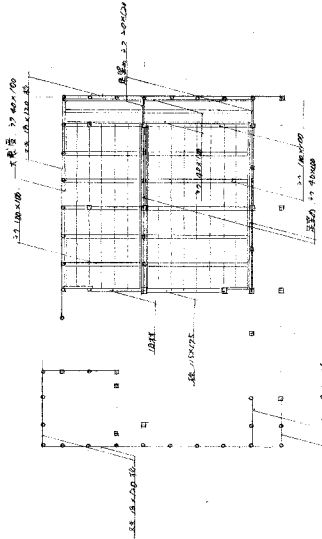


築大邑時重忠邸
系家(旧中島家)移築復元
工事設計図
No. 5/10
断面図

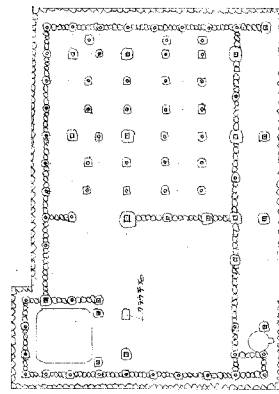


〔軒行〕断面図 1/50

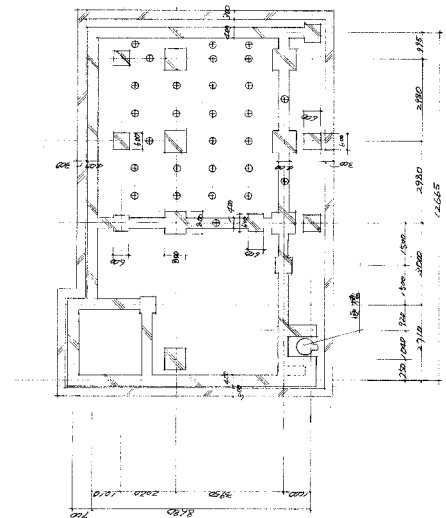
〔瓦葺〕断面図 1/50



床伏図 1/10

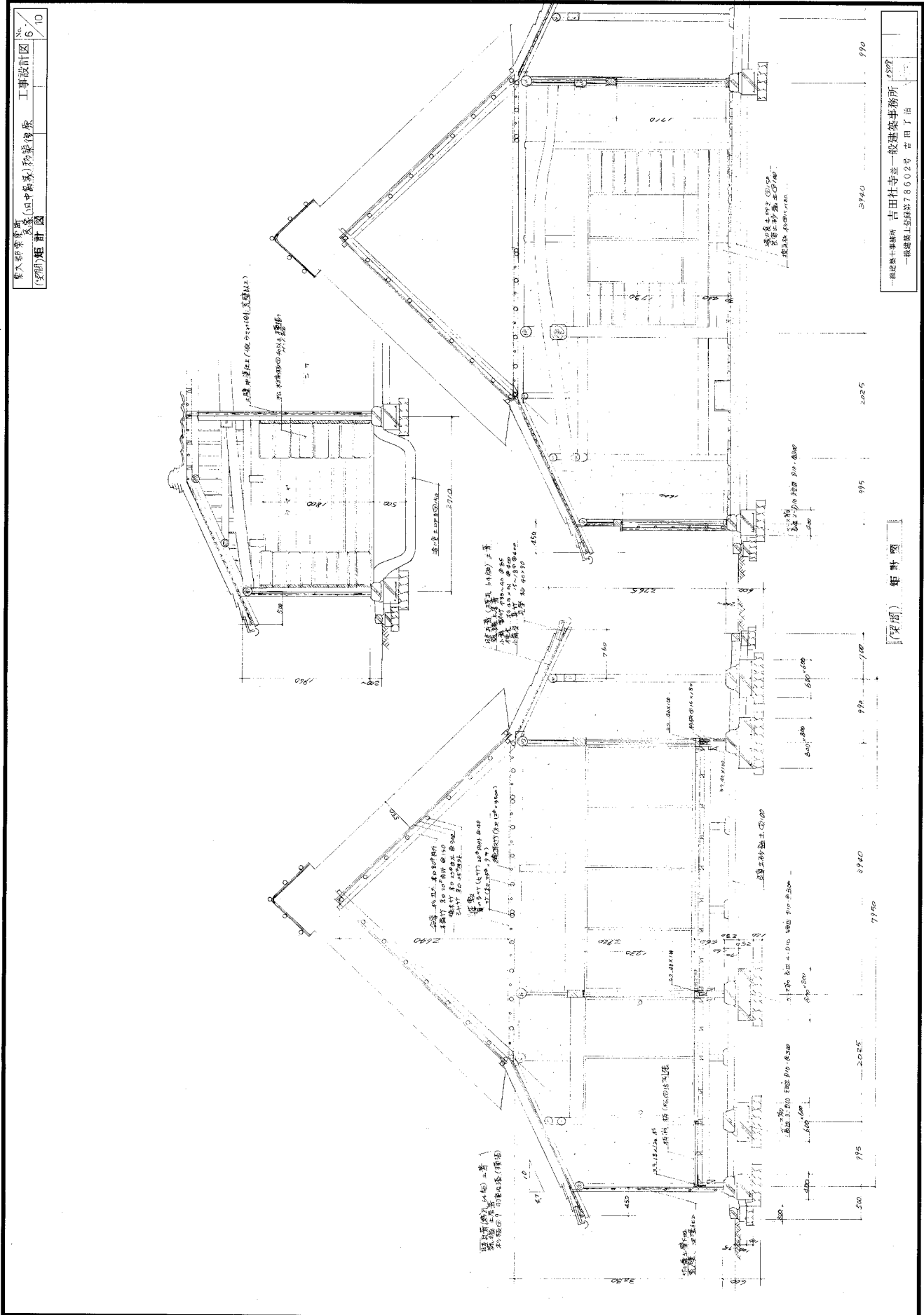


石材伏図 1/400



基礎伏図 1/100

一般建築士事務所 古田社寺非一般建築事務所
〒650-0202 神戸市中央区 古田丁 第7番地
06-6341-1111



名 称 O・M 家住宅（従縁寺庫裏）タイル貼かまど		
来 歴 昭和 50 年に従縁寺の庫裏を建て替えた際、現在のかまどを設置した。このかまどは寺で年に 2 回（3 月、11 月）にある汁講で専ら使うために作られたもので、汁講に参加する門徒が使用した。当初は薪で焚いていたが、数年前からかまどの口の中にガス台を入れ、ガスで焚くようになっていた。今でもガスのホースが入れてある。なお、このタイルかまどは壁面にぴったりと設置されていて、かまどの煙突は家の外側に設けられている。 平成 24 年に本堂横に台所を作り、そこにガス台を設置したため、使用しなくなっている。		
かまどに関する信仰 特になし	所 在 地	栗東市出庭
	築 造 年 代	昭和 50 年
当該かまど以前のかまど 昭和 50 年以前の庫裏には土間に 2 口の土のかまどがあった。形状はやや湾曲していた。このかまども汁講用に使っていた。	口 数	2 口
	法 量（最大高）	68.5cm
備 考	法 量（最大長）	125.5cm
	法 量（最大幅）	83.5cm
	話 者 情 報	昭和 11 年生／男性

名 称 T・T 家住宅タイル貼かまど		
来 歴 昭和 60 年に風呂が傷んだため、風呂をやりかえるなかで、土間はウマヤをなくし、板張りの台所にやり替えた。その際、もとあったかまどを潰して、現在あるタイル貼りの三和かまどを設置した。購入は風呂を設置しにきた甲賀の左官屋経由であった。 かまどをこのとき購入した理由は、家の山で毎年竹の子を採っていて、その竹の子を湯がくのに、おおきな釜が使えるかまどのほうがガスよりも便利だということであった。家自体は昭和 36 年に新築したものである。		
かまどに関する信仰 特になし	所 在 地	栗東市御園（蔵町）
	築 造 年 代	昭和 60 年
当該かまど以前のかまど 話者は昭和 39 年にこの家に嫁いできた。その際は昭和 36 年の家の新築と同時に設置されたかまどがあった。直線型で、表面にはタイルが貼ってあった。中は土だけでつくられていた。口数は 5 つであった。設置されていたのは、土間（いまの板張りの台所の位置）にあり、かまどの前には畳一畳くらいのスペースがあり、かまどの前に長い腰掛けを置き、かまどの世話をした。	口 数	2 口
	法 量（最大高）	70.0cm
備 考	法 量（最大長）	107.0cm
	法 量（最大幅）	75.5cm
	話 者 情 報	昭和 12 年生／女性

名 称 A・Y 家住宅タイル貼かまど		
来 歴 昭和 24 年に生まれた話者は、昭和 34 年に跡継ぎのなかった A 家（実母の妹が嫁いでいた）の養子に入った。生家は A 家の向かいの家である。昭和 51 年に話者が結婚し、その後子どもが生まれたことが契機となって、土間を板間に変更し、現在のかまどを設置した。話者が養子に来てからも、向かいあわせて住んでいた生家で、両家がそろって食事をしていたという。子どもが生まれて、食事の用意などを家で準備するようになり、土間を板間にするなどの変更が必要に迫られたのだという。 現在でも、かまどは使用している。年忌さんや餅つき、赤飯、お寿司を作る際に使っている。		
かまどに関する信仰 特になし	所 在 地	栗東市御園（蔵町）
	築 造 年 代	昭和 53 年ごろ
当該かまど以前のかまど 昭和 53 年に土間を板間にするまでは、土間に別のかまどが置かれていた。白タイル貼りのかまどで、口数は 5 つであった。話者の結婚、出産までは生家で食事をしていたので、あまり使った記憶はないが、あまりない白いタイルだったことを覚えている。	口 数	2 口
	法 量（最大高）	69.5cm
備 考	法 量（最大長）	128.0cm
	法 量（最大幅）	91.0cm
	話 者 情 報	昭和 24 年生／女性

資料編 栗東市内レンガ・タイル製かまど基礎データ

名 称 I・S 家住宅	
来 歴 昭和 42 年に家を新築した際に作ったかまど。タイル貼りで土間に設置されている。直線型で口数は 2 つ。かまどの場所や家の間取りなどは建築当初から変わっていない。かまどを設置したのは、話者の母親の要望で、煮炊きにはかまどが必要ということであった。 作った当初はごはんなどの煮炊きに使っていたが、近年は餅つきや赤飯などの際に使っていた。5～6 年くらい前に（平成 20 年ごろか）話者の母親がなくなってから、ほとんど使っていない。	
かまどに関する信仰 特になし	所 在 地 栗東市上砥山
当該かまど以前のかまど 昭和 42 年以前の家には、別のかまどが土間に設置されていた。土でできた直線型のかまどで、口数は 5 つ。焚口側には掘り込みがあり、掘り込みの上にむしろを敷いて使っていた。この土かまどには、漆喰などの上塗りはなく、背中に瓦を貼るということもされていなかった。	築 造 年 代 昭和 42 年
	口 数 2 口
備 考	法量（最大高） 71.0m
	法量（最大長） 96.0cm
	法量（最大幅） 85.0cm
	話 者 情 報 昭和 23 年生／男性

名 称 S・Y 家住宅	
来 歴 家は昭和 38 年に建てたもので、昭和 50 年代に風呂が傷んだことで、土間を板間に替え、もともとあったタイルかまどを潰して、今の場所に現在のかまどを新たに設置した。 現在のかまどはタイル貼りかまどで、口数は 2 つ。 餅つきなどの際に使っていたが、近年は薪が手に入りやすく、あまり使っていない。	
かまどに関する信仰 かまどの斜め上に「サンボウサン」とよぶ神棚あり。伊勢神宮のお札がある。かつては集落に愛宕講が組織されていて、代参した講員が愛宕のお札を貰ってきてくれた。現在は愛宕講はないが、宮世話が 12 月末ごろに、伊勢神宮・近江神宮・在所の天満宮のいずれのお札が必要か尋ねてくれ、必要なものを受けてきてくれる。 かまどには正月、三重のおかがみをうらじろ、みかんを添えて供える。	所 在 地 栗東市出庭（中村）
当該かまど以前のかまど 昭和 50 年代に現在のかまどを設置する以前は、昭和 38 年に家を建てた際に設置したかまどがあった。土間に設置されていて、黒タイル貼りで口数は 5 つあった。形状は湾曲していた。	築 造 年 代 昭和 50 年代
	口 数 2 口
備 考	法量（最大高） 72.0m
	法量（最大長） 120.0cm
	法量（最大幅） 85.0cm
	話 者 情 報 昭和 4 年生／男性

名 称 M・S 家住宅	
来 歴 昭和 56 年に作ったかまど。もともと昭和 38 年に建てた自宅には別のかまどがあったが、昭和 56 年に滋賀県で国体が開かれた際、関係者や出場者が宿泊する施設が不足していたため、地元の民家が宿泊施設となって受け入れるよう要請があった。栗東市では各自治会に宿泊施設となる民家を提供するよう要請があり、片山は M・S 家など 3 軒が宿泊施設として自宅を提供することになった。これを契機に土間を改装。現在のかまどを自宅につながる別棟に設置した。かまどを作ったオバタ温水は、左官屋ではなく、風呂釜や浴槽を取り扱う業者であったが、懇意にしていたため依頼した。	
かまどに関する信仰 現在、タイルかまどの脇には伊勢神宮のお札が貼り付けられている。片山には伊勢神楽が毎年 2 月中旬から 3 月中旬にかけて回ってくる。M 家では門付けのほか、かまど前でも獅子舞をし、お札を授かるとのことであった。	所 在 地 栗東市荒張（片山）
当該かまど以前のかまど 昭和 38 年に自宅を建てた際にあったのはタイルもしくはレンガのかまどであった。	築 造 年 代 昭和 56 年ごろ
	口 数 3 口
備 考	法量（最大高） 79.5m
	法量（最大長） 228.0cm
	法量（最大幅） 97.3cm
	話 者 情 報 大正 15 年／男性

名 称 K・K 家住宅	
来 歴 話者の母親が昭和 2 年に K 家に嫁いで来た際にはすでにあつたようなので、大正時代のものではないかとのこと。家自体は、天保 5 年ごろに建てられたもの。土間に設置されていて、直線型のレンガかまど。口数は 5 つ。焚口に向かって右 2 つの大きな釜を載せる口が少し高くレンガが積まれていて、この 2 口だけはロストルが設けられている。かまどの上面は磨いたレンガで仕上げられている。かまどの背中部分の下部には一段レンガを斜めにして積んでいる層があり、意匠的にも凝ったものである。 現在は、取り外しているが、このレンガかまどには煙突が設置されていて、5 つの口をつなぐ煙道がある。 また、排煙のための下壁が天井から設置されている。確認できる範囲で、栗東市内では唯一現存する下壁である。 かまどの位置は家の建築当初からは移動しているようなので、下壁も現在の位置にかまどが設置されたことで設けられたと考えられる。	
かまどに関する信仰 伊勢神宮のお札、愛宕さんのお札をかまど前の壁に貼り付けている。今でも毎年伊勢神樂が回ってきて、かまど前で舞い、お札を授かる。受けたお札は、今はガスレンジの横に貼っている。毎年、正月三が日は、一番大きい口のところに三重の鏡餅を置き、灯明で明かりを上げる。また、1 月 17 日と 2 月 3 日（節分）には灯明を上げている。	所 在 地 栗東市下戸山 築 造 年 代 大正期カ 口 数 5 口 法量（最大高） 70.0m 法量（最大長） 264.0cm 法量（最大幅） 90.0cm
当該かまど以前のかまど 昭和 7 年に生まれた話者の記憶には、現在のかまどの前のかまどは記憶にない。伝聞や煤けた痕跡から、以前のかまどは板間になっていたダイドコ部分の壁側に壁と平行して設置されていたのでは、とのことであった	話 者 情 報 昭和 7 年生／男性 昭和 5 年生／女性
備 考	

名 称 S・S 家住宅	
来 歴 昭和 50 年ごろ、話者が 20 歳ごろにもとあつた土かまどを壊して、現在のタイルかまどを設置した。タイルかまどは餅つきなどに用いていたが現在では使用していない。	
かまどに関する信仰 伊勢神樂の札、大黒様をタイルかまど上部に祀る。	所 在 地 栗東市上砥山 築 造 年 代 昭和 50 年ごろ 口 数 2 口 法量（最大高） 78.0m 法量（最大長） 106.0cm 法量（最大幅） 74.0cm
当該かまど以前のかまど 土かまどは昭和 50 年ごろまで土間にあつた。 直線型で五口。全体が黒っぽい色で表面はザラザラした感じではなかった。もしかしたら漆喰だったのかも知れない。 場所はウマヤの裏にあつた。土間から直接立ち上がり、背面に瓦などは使っていなかった。いつごろからあつたものかは、不明だが話者の生まれた頃にはすでにあつた。	話 者 情 報 昭和 29 年生／男性 昭和 35 年生／女性
備 考 ツシ部分に板を張った際、作業した大工が発見した棟札があり「安政四年巳拾月下旬 上砥山村 大工清八作」と記されている。	

名 称 S・Y 家住宅	
来 歴 昭和 32 年に話者が結婚して嫁いだ際には土間に土かまどがあつた。 結婚直後に夫とともに他県で生活することになり、昭和 49 年に戻って生活することになったが、この間に土間が改築され、土かまどから現在のタイルかまどに変更されていた。	
かまどに関する信仰 愛宕さんのお札。 愛宕講を六地藏 3 組 23 軒で組んでいて、毎年当番が愛宕さんにお札としきみを授かりに上がる。伊勢神樂は来るが、かまど前で舞ってもらうことはしていない。	所 在 地 栗東市六地藏 築 造 年 代 昭和 32～49 年ごろ 口 数 2 口 法量（最大高） 60.0m 法量（最大長） 108.0cm 法量（最大幅） 75.0cm
当該かまど以前のかまど 土かまどは 3 口直線型であつた。土間にあつたが、土間から直接立ち上がっていなかった。かまどと土間のあいだに隙間があつた。	話 者 情 報 昭和 4 年生／女性
備 考	

図・表等一覧

章	節	項	図表No.	図タイトル	備考
カラー図版			1	旧中島家住宅に復元された初代かまど	
カラー図版			2	本事業により再生した旧中島家住宅 2 代目かまど	
カラー図版			3	初代かまど最後の炊飯	
カラー図版			4	初代かまどに最後の火が入る	
カラー図版			5	解体前のきよめ	
カラー図版			6	解体 一打目	
カラー図版			7	解体	
カラー図版			8	解体	
カラー図版			9	解体	
カラー図版			10	解体	
カラー図版			11	土づくり 解体した土の粉砕	
カラー図版			12	土づくり 解体した土を篩にかける	
カラー図版			13	土づくり 解体した土を粉砕、篩にかける	
カラー図版			14	調査 解体作業を中断し断面を調査	
カラー図版			15	解体 最後の一打	
カラー図版			16	ワラスサづくり 古畳を解体して藁を取り出す	
カラー図版			17	ワラスサづくり 古畳の藁は押し切りで細分しワラスサに	
カラー図版			18	ワラスサづくり 古畳の藁は押し切りで細分しワラスサに	
カラー図版			19	ワラスサづくり 硬い藁はヨコツチで叩いて柔らかくする	
カラー図版			20	土づくり 前回解体した土も引き続き粉砕	
カラー図版			21	土捏ね ワラスサと土をフネに入れ捏ねる	
カラー図版			22	土づくり 表面仕上げ用の土の分離、フネから取り出す	
カラー図版			23	土づくり 表面仕上げ用の土の分離、フネから取り出す	
カラー図版			24	泥団子づくり 積み上げ用の土に加えるワラスサづくり	
カラー図版			25	泥団子づくり 新しいワラスサを加えて最後に捏ねる	
カラー図版			26	泥団子づくり 捏ねた土を団子状に纏める	
カラー図版			27	泥団子づくり ワラスサを混ぜながら泥団子をつくる	
カラー図版			28	泥団子づくり	
カラー図版			29	土積み上げ 中型に合わせて積み上げ、団子どうしをなじませる	
カラー図版			30	土積み上げ 積み上げた土は手や木鏝でならして成型	
カラー図版			31	土積み上げ 積み上げた土は手や木鏝でならして成型	
カラー図版			32	土積み上げ 積み上げた土は手や木鏝でならして成型	
カラー図版			33	土積み上げ 木鏝で成型	
カラー図版			34	仕上げ用土づくり	
カラー図版			35	表面仕上げ塗り 仕上げ用土を鏝板に取り金鏝で塗りつけ	
カラー図版			36	表面仕上げ塗り	
カラー図版			37	表面仕上げ塗り	
カラー図版			38	表面仕上げ塗り	
カラー図版			39	表面仕上げ塗り	
カラー図版			40	表面仕上げ塗り	
カラー図版			41	表面仕上げ塗り	
カラー図版			42	表面仕上げ塗り	
カラー図版			43	再生された 2 代目かまどの除幕	
カラー図版			44	伊勢大神楽森本忠太夫組による電祓	
カラー図版			45	2 代目かまどに火が入る	
カラー図版			46	2 代目かまど初めての炊飯	
カラー図版			47	2 代目かまどではじめて炊き上がったごはん	
カラー図版			48	旧中島家住宅前では伊勢大神楽の上演	
カラー図版			49	講演会 八木透氏（佛教大学 歴史学部教授）による講演	
カラー図版			50	事例報告 寺崎正直氏（グループとみじん）による事例報告	
章	節	項	図表No.	図タイトル	備考
			地図	栗東市位置図	
			地図	旧中島家住宅旧所在地周辺地図	
			地図	旧中島家住宅現所在地 栗東歴史民俗博物館敷地内	
2	1	-	図	1 旧中島家住宅 外観	
2	1	-	図	2 旧中島家住宅 矩計図	
2	1	-	図	3 合掌組と平面との関連	
2	2	2	図	4 旧中島家関係系図	
2	2	3	図	5 旧中島家住宅平面図（解体時）	作図:吉田社寺並一般建築事務所
2	2	3	図	6 旧中島家住宅平面図（移築復元時）	作図:吉田社寺並一般建築事務所
2	2	3	表	1 旧中島家住宅改変履歴及び移築復元にかかる作業内容	

2	3	1	図	7	滋賀県内の特徴あるかまど	作図:よろずでざいん (中川未子) 写真提供:滋賀県教育委員会事務局文化財保護課
2	3	1	表	2	「栗東町民俗調査票」によるかまどの口数	
2	3	1	表	3	「栗東町民俗調査票」によるかまどの形状	
2	3	1	図	8	栗東市観音寺に存在した土製勾玉型かまどの例	写真提供:滋賀県教育委員会事務局文化財保護課
2	4	2	図	9	初代かまど 位置決め 鍋釜を置き設置場所を決定	
2	4	2	図	10	初代かまど 土積み上げ 馬蹄形に土を積む	
2	4	2	図	11	初代かまど 土積み上げ 約 10cm ずつ積み上げる	
2	4	2	図	12	初代かまど 土積み上げ・成型 背面を整える	
2	4	2	図	13	初代かまど 焚口づくり 瓦を芯に焚口を作る	
2	4	2	図	14	初代かまど 表面仕上げ 仕上げ用の土で表面を整える	
2	4	3	表	4	「栗東町民俗調査票」による栗東市域での土製かまどの工法	
2	4	3	図	15	旧中島家住宅初代かまど断面図	計測作図:下高理恵氏 二宮直美氏 畑本陽子氏
2	4	3	図	16	「栗東町民具台帳」に採集された自家製の土製かまどの例	
3	2	-	図	17	旧中島家住宅 初代かまど	
3	2	-	図	18	旧中島家住宅 初代かまどの三次元計測図と高さのみ 20cm 上げた予想図	画像作成:立命館大学情報理工学部田中寛研究室 三次元計測:岡本篤志氏
3	2	-	図	19	厚み 15cm、高さ 20cm 上げた予想図	三次元計測・画像作成:岡本篤志氏
3	2	-	表	5	ワークショップの工程案 (平成 27 年 1 月作成)	
3	3	-	図	20	実行委員会による土づくり作業 (土採取)	
3	3	-	図	21	実行委員会による土づくり作業 (フネのなかでの土捏ね)	
3	3	-	図	22	初代かまどの解体	
3	3	-	図	23	解体した土を細分して再利用できる土へ	
3	3	-	図	24	三和土の復旧	
3	3	-	図	25	押し切りを使って古畳からワラスサをつくる	
3	3	-	図	26	フネに土とワラスサを足して土を捏ねる	
3	3	-	図	27	ワラスサを加えながら土を団子状に纏める	
3	3	-	図	28	中型のまわりに泥団子を積み上げて成型	
3	3	-	図	29	瓦を鳥居に組んで焚口を成型	
3	3	-	図	30	土の積み上げが完了	
3	3	-	図	31	土の積み上げ方	作図:よろずでざいん (中川未子)
3	3	-	図	32	表面の仕上げ塗り	
3	3	-	図	33	鍋釜の掛け口の調整	
3	3	-	表	6	かまど再生への作業工程 (実行委員会による作業も含む)	
3	3	-	図	34	土の捏ね直し	
3	3	-	図	35	フネの四隅から水を抜く	
3	3	-	図	36	水抜き用の排水パイプをフネに入れる	
3	3	-	図	37	躯体の乾燥後、中型を外す	
3	3	-	図	38	躯体の乾燥	
3	3	-	表	7	栗東市域を檀那場にする伊勢大神楽	
3	3	-	図	39	加藤源太夫組による竈祓 (2015 年 栗東市片山)	
3	3	-	図	40	再生サポーターによる 2 代目かまどの除幕	
3	3	-	図	41	森本忠太夫組による 2 代目かまどの竈祓	
3	4	1	表	8	かまど再生サポーターの年齢層	
3	4	1	表	9	かまど再生サポーターの参加の動機	
3	4	2	図	42	実行委員会と再生サポーター	
3	4	2	図	43	再生サポーターでの 2 代目かまどでの初めての炊飯	
3	4	1	表	10	再生サポーターの参加動機と再生したかまどの活用アイデア一覧	
5	-	-	図	44	旧中島家住宅初代かまど	
5	-	-	図	45	旧中島家住宅 2 代目かまど	
資料編					旧中島家住宅初代かまど実測図面	計測作図:下高理恵氏 畑本陽子氏
資料編					旧中島家住宅 2 代目かまど実測図面	計測作図:下高理恵氏 畑本陽子氏
資料編					栗東市東坂 T・T 家住宅瓦製かまど実測図面	計測作図:下高理恵氏 畑本陽子氏
資料編					草津宿本陣 土製 5 口勾玉型かまど実測図面	計測作図:下高理恵氏 畑本陽子氏
資料編					栗東市井上 I・K 家住宅土製改良かまど実測図面	計測作図:下高理恵氏 畑本陽子氏
資料編					旧中島家住宅解体調査時 平面図	作図:吉田社寺並一般建築事務所
資料編					旧中島家住宅解体調査時 立面図	作図:吉田社寺並一般建築事務所
資料編					旧中島家住宅移築復元時 平面図	作図:吉田社寺並一般建築事務所
資料編					旧中島家住宅移築復元時 断面図 基礎伏図 石材伏図 床伏図	作図:吉田社寺並一般建築事務所
資料編					旧中島家住宅移築復元時 矩計図	作図:吉田社寺並一般建築事務所

平成 27 年度 文化庁地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業

栗東歴史民俗博物館旧中島家住宅かまど再生事業報告書

編 集：市民とともに行う栗東歴史民俗博物館創造活動事業実行委員会

発 行：市民とともに行う栗東歴史民俗博物館創造活動事業実行委員会
(事務局) 栗東歴史民俗博物館

住所：滋賀県栗東市小野 223-8

TEL:077-554-2733/FAX:077-554-2755

発 行 日：平成 28 (2016) 年 3 月

